

# 平和の炎

Vol.3

## 第3回読谷村平和創造展

—— 平和郷はみんなの手で ——

〔読谷村民の戦時体験記録1〕



読 谷 村

発刊にあたって

## 「平和に勝る福祉はなし」

読谷村長 山 内 徳 信



これまで、村民の絶大なるご協力のもとに平和村づくりを進めてまいりましたが、戦争とは何か、そして平和とは何かをあらためて問い直し、日常生活の中で平和問題を考える機会としたいというのが、本展の主旨であります。

思えば戦後45年間、読谷村民は持てる英知と情熱の限りを尽くし平和郷読谷村の建設のため頑張ってきたのであります。

それは、去る沖縄戦で多大な犠牲の上に私たちが学びとった教訓、すなわち、軍隊は住民の安全を守り、平和と自由を保障してくれるどころか、結果的には全てのものを破壊する以外のなにものでもなく、国民一人びとりにあらゆる意味での犠牲を強いるものであったという教訓を村政の中に生かし、二度とあのような戦禍に巻き込まれることがないような地域社会をみんなの手で築き上げる過程でありました。したがって、今後とも住民の生命財産を守り、豊かで平和な地域社会建設のために具体的な平和創造運動を展開していくことは極めて重要なことであります。

さて、今日の情勢を見てみますと「ベルリンの壁」の崩壊に象徴される東西冷戦の終焉、そして新たな平和共存への全世界的な動きが顕著になってまいりました。しかしながら、沖縄では新たな基地建設や軍事演習が強行され、米軍占領時と変わらない状況にあると言っても過言ではないと思います。

また慰霊の日の休日廃止問題では、県民の意志を無視した県の姿勢に多くの反対運動が続き、ついに存続の方向へ決するということがありました。

こういう状況の中で感じますことは、沖縄の人々の心の中に秘めた感想や思いを表面にあまり出さないという人徳が本当の意味での徳になりえているかということです。「戦争体験の風化」もその一つの現れかもしれません。

しかし、人々の心の中では年月の経過とともに、風化どころか、より鮮明により正確にあの悲惨な戦争体験が浮かび上がってきているのではなからうかと逆説的ですが、そう思うようになったのです。

一人の人間の人生の中で受けた大きな心の傷は簡単に癒されるものではありません。

ません。沖縄の人々が抱いている「生き残った者の心の負い目と生かされた者の責務」はある意味では感情が風化して初めて冷静に語ることができるようになるものだと思うのです。

とはいえ、戦後45年、多くの戦争体験者の高齢化や死亡していくという状況に鑑み、一日も早く戦争体験者の聞き取りを積み重ねていくことは大事な事業となっておりまゐりました。

本村でも村史の「戦争編」の準備を急いでいるのはそのことを意味しております。

今回『平和の炎』Vol. 3では多くの体験者の中から、これまで聞き取り調査を実施した方々の中から、紙面の都合もあり、16名の方々の体験談をまとめ発刊することに致しました。

沖縄戦で亡くなった方々への追悼の意を込め、真実を語りあかし、受け継いでいくことの重要性を改めて強調し、今後の平和創造運動の一助になれば幸いです。

1990年8月1日

# 目 次

## 第 一 部 住民の体験

|                 |              |
|-----------------|--------------|
| 学童疎開の引率教師として    | 宮城伝三郎..... 3 |
| 対馬丸で九州へ疎開       | 喜友名トミ..... 7 |
| 牛馬耕講習と国頭避難      | 大湾 トキ..... 9 |
| 十・十空襲そして恩納岳への避難 | 真玉橋 元.....11 |
| 国頭疎開引率          | 長浜 真長.....14 |
| 妹を背負い山中彷徨       | 波平 次枝.....17 |
| 大湾の壕から国頭へ避難     | 宮城 元信.....23 |
| 開墾地銀原への避難       | 松田 武雄.....29 |
| 国頭避難            | 屋良 嘉子.....32 |
| 読谷村内で捕虜になる      | 喜友名タケ.....35 |

## 第 二 部 兵隊・防衛隊・軍属の体験

|            |              |
|------------|--------------|
| 戦時体制から終戦まで | 当山 重信.....39 |
| 三度にわたる召集   | 池原 蒲三.....44 |
| 防衛隊召集      | 比嘉 実盛.....48 |
| ピンクの召集令状   | 松田 貞子.....52 |
| ひめゆり学徒隊    | 比嘉 秀.....55  |
| 私の戦争体験（転載） | 国吉 トミ.....62 |

# 第一部

## 住民の体験

# 学童疎開の引率教師として

宮 城 伝三郎

( 明治42年生、当時36歳  
比謝町出身、大木在住 )

## 疎開学童募集

当時私は宇久田国民学校に勤めていて、妻は屋良国民学校に勤めていました。

疎開は県から勤められ、疎開を希望する生徒達を学校で募集しました。

各学校ごとに40名の希望者がいればいいということで、40名の生徒に引率教師1名、炊事や雑用をする人が2名つくようになっており、対象学童は3年生以上ということでしたが、高等科に兄さんや姉さんがいれば1、2年生でもかまわないということでした。

4月には募集をはじめたのですが、40名に達したのは、8月に入ってからのことでした。先生が引率して行くといっても、父兄はやはり心配そうでしたが、特に低学年の生徒達は旅行にでも行くような気持ちで、すぐ帰れると思ったらしく喜んでいました。当時は疎開については、みんなよく知らなかったのです。

希望者が40名に達したので、普天間にあった教育事務所に報告に行き、「宇久田国民学校は40名の希望者がいますが、誰が連れて行くんですか」と尋ねましたら「学校の先生が連れて行かないといかんよ」ということで、その場で「それでは私がいきましょう」ということになりました。

妻の方も、屋良国民学校の学童疎開児童を引率することになり、両方の学校から80名を連れて行きましたが、生徒の中には1年生も1人いました。

私どもには二男二女、4人の子がいて、末の次女は、まだ生後3ヵ月でした。

## 出航

学校には満州から転戦してきた北海道の部隊が駐屯していたので、その軍用トラックに乗って、昭和19年8月27日に那覇に行き、その日は那覇の西新町の旅館に泊まりました。

本土への出発は多分2、3日後だと思い、ゆうゆうとしていました。ですから、生徒達にも「那覇に親類がいる人はそこに行ってきてもいい」と言ってあったのです。

ところが、軍艦香取に80名分の空きがあり、乗せるからということで、その夜の午後7時頃係の人が来て「宇久田国民学校と屋良国民学校の生徒80名を乗せるから、すぐ手続きしなさい」ということになり、急遽9時頃までに手続きをし、翌朝出航しました。

船が難破した時のいかにするために、みんな竹を持っていたのですが、軍艦に乗るのだから大丈夫だということで、その竹は乗船前に捨ててしまいました。

生徒達の持ち物は着替えの着物と日用品だけでした。

夜の10時頃だったか、敵潜水艦が近づいているということで、兵隊が戦闘配置につき一時は緊迫した状況になりましたが、生徒達は寝ていてそのことには気がつかなかったようでした。しばらくするとその潜水艦は遠ざかったということで、兵隊も元の位置に戻りました。

## 宮崎県の野尻国民学校へ

私達の乗った軍艦は、29日の朝、鹿児島港に着きました。

後で聞いたのですが、21日に那覇を出航した

商船はやられたということでした。そんな事は知らされず、下船してはじめてそのことを知りました。その沈められた船には、那覇国民学校の生徒と一般疎開者800人位が乗っていたそうです。それでも、その中から奇跡的に数十名は助かったようでした。荷物は別の船で着いていて、沈没して死んだ子供達の物を後でみんなに分けました。

疎開した当時、私の長女は5年生で、長男は4年生、次男は1年生でした。子供達は古堅国民学校に通っており、那覇を出航する時のごたごたで、次男と次女は一緒に船でしたが、長男と長女とは別々になってしまいました。鹿児島に着いてから、対馬丸が沈没したということを知り、離れ離れになった子供達のことを心配で、毎日鹿児島に連絡しましたが、私達が宮崎に着いて1週間目に、やっと古堅国民学校も無事に着いたと電話がありましたので、2人の子供を引き取りに行き、その後は家族みんな一緒に

でした。

宮崎県の方では、学校ごとに受け入れ先が割り当てられていました。

鹿児島に一泊し、宮崎から疎開受け入れの学校の山本教頭先生と係の方が迎えにいらして翌30日に鹿児島を出発しました。

汽車で小林まで行きそこからバスで乗り継いで2里ほど行ったところでした。校長先生は大屋という先生で、疎開係は役所の人で、クツハラという人でした。お寺では婦人会の人々が夕飯や布団を準備して待っていてくれて、そこには1日いました。

宇久田国民学校の生徒は宮崎県<sup>にしもろかた</sup>西諸郡<sup>のじり</sup>野尻国民学校で、その裁縫室にありました。

最初は宇久田国民学校と屋良国民学校は別々の学校にいました。私は野尻国民学校に、妻は<sup>かみや</sup>紙屋国民学校に行きました。野尻国民学校と紙屋国民学校は1里位しか離れていなかったのですが、妻は3ヵ月の赤子を連れていて、生徒の

昭和19年度沖縄集団引揚受入児童数（昭和19年4月1日現在）

| 受入市郡  | 受 入 町 村                             | 男     | 女     | 計     | 教員 | 寮母  | 作業員 | 宿 舎                                                    |
|-------|-------------------------------------|-------|-------|-------|----|-----|-----|--------------------------------------------------------|
| 宮 崎 市 |                                     | 306   | 167   | 473   | 14 | 18  | 18  | 小川屋、宮崎国民、蘭検定所、宮崎中学、江陽高女、実践商業、第二高女、赤江青年                 |
| 東諸県郡  | 高岡町、穆佐町、綾町                          | 68    | 29    | 97    | 4  | 4   | 6   | 高岡校、穆佐校、綾校                                             |
| 西諸県郡  | 小林町、高原町、飯野町、野尻村、真幸村、加久藤村            | 451   | 239   | 690   | 20 | 29  | 23  | 小林青校、小林校、高原校、広原校、飯野青校、飯野校、野尻校、元紙屋校、真幸青校、真幸校、加久藤青校、加久藤校 |
| 北諸県郡  | 山田町、高崎町、西嶽町                         | 100   | 50    | 150   | 5  | 8   | 8   | 山田校、木ノ川内校、高崎校、西嶽校                                      |
| 児 湯 郡 | 高鍋町、三財村、上穂北村、美々津町                   | 90    | 97    | 187   | 6  | 6   | 10  | 高鍋校、上江校、三財校、上穂北校、美々津校                                  |
| 東白杵郡  | 門川町、北郷町、東郷村、西郷村、富島町、岩脇村、細島町、南方村、北方村 | 380   | 218   | 598   | 15 | 24  | 28  | 川内校、門川校、北郷校、坪谷校、福瀬校、第一、第二富島校、平岩校、南方青校、南方校、上南方校、北方校     |
| 西白杵郡  | 岩戸村、七折村、上野村、岩井川村、高千穂町、田原村           | 274   | 238   | 512   | 13 | 21  | 22  | 岩戸校、山裏校、宮水校、新町校、押方校、上野校、岩井川校、高千穂校、高千穂実業、田原校            |
| 宮 崎 市 | 宮崎師範寮                               | 32    | 35    | 67    | 2  | 3   | 2   | 女子部附属校                                                 |
|       | 合 計                                 | 1,701 | 1,073 | 2,774 | 79 | 113 | 117 |                                                        |

『宮崎県社会事業史』より

面倒を見れないから是非一緒にしてくれということで、ナガミネという村長にお願いしました。80名の生徒の面倒をみることになるが、それでいいならということで、1週間目に屋良国民学校の生徒も野尻国民学校へ来て、それからはずっと一緒でした。

## 疎開先での生活

低学年の生徒達は最初の頃は、夜になるとよく泣いていましたが、5ヵ月を過ぎる頃からは泣く子はいませんでした。

そこでは付き添いの方達は主に飯炊きをして働き、疎開した生徒達はそれぞれの学年に編入されていましたので、引率教師は勉強を教えるというより、生徒達の生活の面倒をみたり、食糧買い出しに行ったりしていました。それでも、高等1、2年の女子の担任の先生が召集されたということで、しばらくはその学級の担任をしました。3ヵ月くらいで、代わりの先生がみえたので、代わってもらいました。学級をもっていると芋の買い出し等もなかなかできず、付き添いで来た人に頼んでばかりいました。その頃食糧は配給制で、配給米は1人1日1合5勺でしたが、それだけではとても足りないのので、よくさつま芋の買い出しに行きました。

国から疎開学童1人につき、1日の生活費として50銭の支給があったので、そのお金で買い出しに行ったのですが、闇市ではそんな値段ではとても買えるものではありませんでした。町から来る人には高い闇値で売っていましたが、野尻の人々は私達疎開者に対してとても親切で、安く売ってくれてとても助かりました。そうでもなければ、あの時代に50銭ではとても暮らせるものではありませんでした。

生徒達はそれぞれの学級で勉強し、学校が終わると裁縫室に戻って来て、食事はみんな一緒

でした。1日1食は御飯であとはさつま芋が主食でした。

その頃は宮崎でも、若い人は召集され、残っているのは年寄りと女性・子供だけで、人手不足でした。

野尻に行って半年位たった頃から、疎開した生徒達も田植え等の奉仕作業に行くようになりました。作業に行くと白い飯、銀飯をもらえるということで、生徒は喜んで奉仕作業に行きました。そうこうしているうちに田植えも上手になっていました。

宮崎の方々には、とてもお世話になっているのに、ぼんやりしてはいけないということで、小林の大地主が野尻に畑を7反歩もっているというのを聞き、小林まで行ってこの人に土地を貸してもらいました。学校から帰って来るとみんなで畑を耕し芋を植えました。宮崎では芋には肥やしを入れませんでした。私達が肥やしを入れるのを見て「さつま芋に肥やしを入れるのか」といって珍しがっていました。みんなで作った芋はとてもおいしかった。

沖縄に十・十空襲があったことを疎開先で聞きましたが、その時生徒達も泣いていました。

野尻国民学校を卒業後、中等学校に進学したい生徒は受験させ、小林女学校や小林中学校、宮崎農林等に計11名が合格しました。バス等もそんなに頻繁にはないので通うことはできませんでしたので、寄宿舎に入りましたが、米を持ってくるように言われたらしいです。疎開して来た生徒達なので、米はありませんから、お金を納めることにしてもらいました。困ったことに国民学校を卒業すると50銭の支給がなくなるので、残った生徒の支給分でそれを賄いました。それが長く続くと学校に通わせるのは難しいと思っていた。

沖縄に米軍が上陸したというのは新聞等で報道され、読谷沖に米軍の軍艦がいっぱい並んで

いる写真も新聞に載っていました。生徒達は沖縄は全滅して、親や家族もみんな死んだと思っていたのです。新聞にもそう書いてありますし、手紙も届かず音信不通でしたから。昭和21年に沖縄へ引き揚げる時まで、家族の消息はわかりませんでした。

## 終 戦

私は玉音放送を、学校の職員室でみんなと一緒に聞きました。戦争が終わったことを、生徒達は知りませんでしたので、私が話して聞かせました。沖縄は全滅したそうだから、これから4、5年は帰れないだろうということで宿舎を造ることになりました。

山の中に兵舎があり、そこにいた兵隊はみんな出て行き、空いていましたので、私達の宿舎を造りたいからということで村長と相談して、それをもらいうけました。

その頃には、自分の子供が宮崎に疎開しているということで、フィリピンから野尻に引き揚げてきた父兄がいて、その中に大工さんもいましたので、その人達に頼んで、45坪の宿舎と15坪の付属建物を造ってもらいました。その頃は釘もガラスも配給だったのですが、宮崎県庁にお願いに行くと、県庁の人も疎開者、特に疎開児童の場合は親も来ていないということで優先してくれました。

昭和21年5月か6月頃宿舎は完成しました。その宿舎に4、5年は住むことになるだろうと思っていたのですが、その年の11月には、沖縄に引き揚げるため、鹿児島に移りました。結局そこには6ヵ月位しか住みませんでした。

## 沖縄へ引き揚げる

沖縄に引き揚げる時は、読谷を境に北部と南

部に分けられて帰されたのですが、北部に引き揚げる人はあまりおりませんでした。定員に達しないと引き揚げ船は出ないので、鹿児島で1ヵ月位待たされました。鹿児島では煙草の葉を乾燥させる所を改造した所にいました。

米軍の船で帰ったのですが、生徒達は全員元気でした。引き揚げる時には生徒達ひとりひとりにお金が支給されました。引き揚げる間際になって、沖縄には鍋も何も無いそうだとということで、そのお金を持って皆で都城に行き、日用品を買いこみました。そのお金にはずいぶん助けられました。

沖縄に引き揚げたのは12月の中旬以降だったと思いますが、はっきりは覚えていません。鹿児島から出航し、那覇港に着き、どこに行くのかわからなかったのですが、着いたのはインヌミヤードゥイ（現沖縄市高原）でした。

そこには1週間位いました。そこで生徒達は親や親戚に引き取られて行きました。1週間程で、無事全員引き取られ、残った生徒はいませんでした。

戦後、野尻小学校の百周年記念式の時に、案内状が届きましたので、当時疎開した生徒を集めて寄付を募り、10名程が野尻に行き、その式典に参加させてもらいました。

その式典の前に、野尻小学校から要請があり、私は、記念誌に疎開当時の思い出を書きました。疎開した生徒達は今でも、沖縄や宮崎で同窓会を開いたりして交流を続けております。

（1990年3月2日採録）

# 対馬丸で九州へ疎開

喜友名 ト ミ

( 昭和11年生、当時9歳、波平  
出身、屋号東伊波、旧姓大城 )

## 対馬丸

当時父は車の運転ができたので、軍属みたいなかんじで北飛行場で働いておりましたので、一緒に疎開するつもりでしたが、それはできませんでした。

母ウミトは32歳ぐらいで、長女である私（昭和11年生）と弟善治（昭和13年生）と善孝（昭和15年生）の4人は対馬丸で一般疎開することになりました。

近所の宮里さん（屋号イリマチムトゥ 現在宜野湾在住）の家族も5、6名一緒に疎開することになっていました。

私は当時国民学校の2年生でしたのでよくわからないのですが、公民館等から疎開の呼び掛けがあったのだと思います。

私は本土に行けるということでとても嬉しかったのを覚えています。その頃はどこか遠いところに行くということはほとんどありませんでしたので、旅行にでも行くような気持ちでした。

対馬丸が遭難して一緒に乗っていた母と弟の2人は亡くなってしまいました。

私はかろうじて助かったのですが、その時のことは思い出したくないので、あまり話したくありません。

私はその後、同じく対馬丸の生存者である楚辺出身の宮城政和さんと一緒に鹿児島に上陸しました。

## 古堅国民学校の生徒との疎開生活

宮城県の加久藤村<sup>かくとう</sup>というところに古堅国民学校の生徒が疎開しているということでしたので、私達は鹿児島からそこに連れて行かれました。

幼かったので詳しい年月日は覚えていないのですが、食事もうあんまりないし苦しかったということだけはよく覚えています。乞食みたいな感じでした。

宮崎では首里出身の野崎先生や読谷出身の宮城伝三郎先生にもお世話になりました。

私が行った時、古堅国民学校の疎開学童は学校の裁縫室にいたと思います。そこで寝泊まりして学校に通っており、寄宿舎か寮で生活をしているみたいな感じでした。

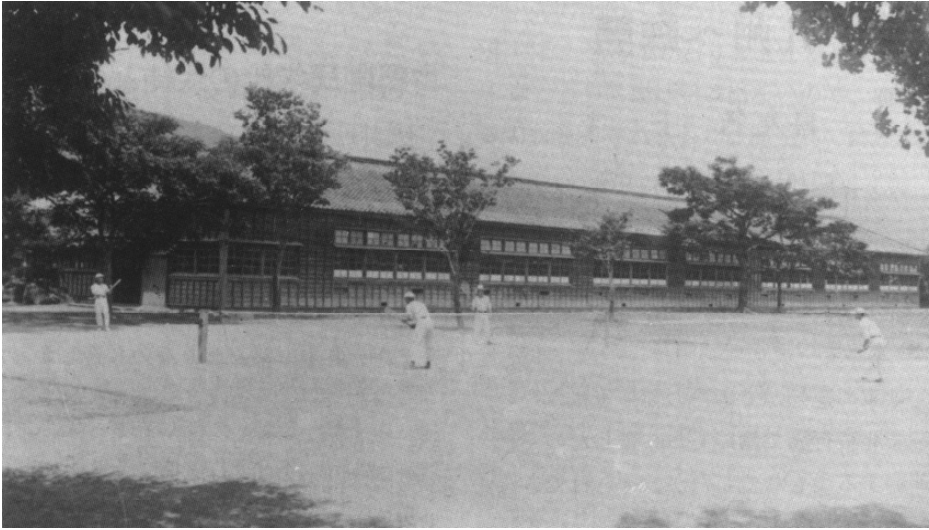
ご飯を炊く炊事のおばさん達が2、3名いらして、私は途中から加久藤国民学校に入ってきたのではっきりはわからないのですが、この方達は疎開学童と一緒にについていらしたと思います。

はっきり覚えていないのですが、疎開学童は40～50人くらいいたと思います。上級生が卒業していくので、だんだん人数は減っていききました。

どのくらいの期間いたかはよく覚えていませんが、加久藤国民学校の近くの永山公会堂という所にもいました。また加久藤国民学校と道を隔てた所にあった加久藤青年学校の講堂にもいたような気がします。

宮城政和さんは一緒に対馬丸から助かったということもあり、妹のようによくしてくれました。

古堅国民学校のお兄さんお姉さん達と一緒にでしたが、高学年の人は卒業して行き、新しく入学してくる疎開学童はもちろんいませんし、学



古堅国民学校の疎開児童がお世話になった加久藤国民学校当時の校舎。  
(写真提供宮崎県えびの市立加久藤小学校)

童疎開は3年生以上ということでしたので私が一番年下でした。

食事は、兵隊に供出して後の残りを食べていたのか、それとも買って来て食べていたのかはつきりわからないのですが、じゃがいもなんかでも小さいのをまるごと炊いたり、煎り豆等も1人何粒というふうに決められていて、飢えをしのぐ程度の食糧しかありませんでした。贅沢は絶対に許されませんでした。たとえば、おしっこをしたところに落ちた豆でも平気で食べました。

学校が終わってから買い出しに行ったこともありましたが、疎開児童ということで憐れんでお金をとらない人もいました。こうしてみんなが買って来たものを集めて食事を作っていたのです。

また、薪を取りに行き、製材所の杉の皮を剥いで怒られたこともありましたが。

時には買い出しに行き何も買わず、そのまま帰ると怒られるので、近くの川原で泣いているうちに泣きつかれて、そこで眠ってしまった

こともありましたが。その時は、先生方が心配して探しに来てくれました。

対馬丸の遭難で家族を亡くした私を不憫に思ってくれたのでしょう、担任の大王ツユ子先生は、自分の着物をほどいて、私の服を作ってくれたり、とてもよくして下さいました。あの時のありがたさは今でも忘れられません。

当時永山公会堂の近くに住んでいた人から「ぜひ養女に」という話があったのですが、私は沖縄に帰るということで断りました。

祖母は私がいつ引き揚げてきてもすぐ迎えられるように、引き揚げ地の近くで作業に出て待っていたようですが、私達が引き揚げて来た日がちょうど日曜日で、作業は休みの日だったのです。他の子達が一人、二人と親や親戚・知人が迎えに来て帰って行くのに、私は取り残され、とても寂しい思いをし、何のためにここまでがんばってきたのかという気持ちになりました。

(1990年3月12日採録)

# 牛馬耕講習と国頭避難

大 湾 ト キ

( 大正12年生、当時22歳  
楚辺、屋号登殿内、旧姓比嘉 )

## 憧れの本土へ

戦前は年頃になると、女の人達は本土の紡績工場に行く人が多く、近所の若い姉さん達が本土の紡績工場から、色白になって帰って来るのを見て憧れ、私も行ってみたいと思っていました。

それで私は17歳の時、大阪の紡績工場に行きました。そこでは従兄弟の兄さんに引き取られ、楚辺出身の人がやっている下宿屋から1年近く工場に通って働きましたが、つまらなくなって辞めてしまいました。

それから、大阪の高島屋の食堂で勤め始めましたが、礼儀作法が厳しくて、これはだめだというところで家に帰る決心をしました。

## 帰 郷

家に戻ると、父に「自分勝手に出て行って帰ってくるのも自分勝手に帰って来て、明日の船で帰れ」と怒られましたが、兄嫁が父をなだめてくれたお陰で家に居れました。

それから父は「農業するならおいてやるが、出来ないのなら本土に帰れ」と言い、荷物を解かしてもくれませんでした。家では人手不足で農業をする人がいなかったもので、農業することに決まりました。

その日は、知花（屋号）の松田清幸兄さんが軍隊に召集された日でした。

その翌日から畑に出てキビに培土をしました

が、着物を着てやったため、その日の畑仕事が終わる頃には、顔や手足はキビの葉で擦り切れていました。

これではいけないと思い、翌日から兄のズボンと長袖のシャツを着て畑仕事をしました。しかし、そのままだとズボンの裾にドロが付くため1日しか着れませんでした。そこで軍隊のゲートル（脚絆）を使えばズボンにドロが付かない事を考えつきました。ゲートルは、軽く着け心地が良かった。また、青年学校に行く時は、足首から下だけが黒く焼けて恥ずかしかったので、地下足袋を履き、頭にはムンジルー笠をかぶって畑仕事をしました。頭から足の先まで男の格好だったので、はためには女だと分からないようでした。

## 牛馬耕講習

その畑仕事の様子を見た人々が「珍しい子供がいる」と言う事で、新聞に載ってから世間に知られるようになりました。

それがきっかけとなり、村の農業技手の比嘉良平さんの訪問を受け、牧原の訓練所の先生から鋤を習うことになりました。私はその先生から1週間牛を使って講習を受けました。牛馬耕をする前から馬車を持っていたので、馬の扱い方は知っていました。講習では鋤の使い方、歩き方、手綱の使い方等を習いました。その時は、製糖工場が費用を出し私にも日当が出ました。

当時は成人男子はもちろん、学生までも召集され、女の人だけしかいませんでした。

体の小さい女でも、講習を受ければ馬を扱い重い鋤を動かし畑仕事が出来るということを指導するため、各方面の婦人会、青年団、時には、男性を集めて講習会をしました。

講習は、キビやイモの畝立の仕方や、畑の耕



牛馬耕出張指導。右端が大湾トキさん。  
(写真提供 大湾トキさん)

し方の順序等を説明する先生がいて、私はその実演をしてみせました。

私は指導員ではなかったのですが、模範を示すということで読谷村内をほとんど廻り、千原、水釜、北谷、伊礼、上地、越來、具志川、など中頭地区を中心に他村も廻りました。

たしか越來で、こうした講習会をやっていた時だと思いますが、早川知事が訪問してきました。その際、女子青年に「銃後は皆さんが守るんだよ」と言って下さった事がありました。

当初から、自分の希望で鋤を使ったわけではありませんでした、楽しかった。今では、女がズボンを履いてもおかしくない時代ですが、あの頃は女がズボンを履くだけで「男女」と言われました。また、相撲をとったこともないのに「農林生と相撲をとって勝った」という噂話まで出ました。

牛馬耕の講習をしていたのは、昭和16、17年頃で2年位だったと思います。

そのうちに、非常時となり、那覇の与儀試験場も人手不足となりました。そのため私と比嘉良平先生の2人で与儀の試験場でイモ掘りもしました。

## 国頭避難

私が結婚し、22か23歳、子供は2、3歳になった頃、米軍が上陸してきました。

私達の家にも防空壕はありましたので、空襲が来ると、クラガーと行ったり来たりしていました。クラガーに入ったのは、上陸した頃ではなかったかと思います。皆が「上陸しているよ、逃げろ、逃げろ」と騒いで逃げ廻っていたので、私達も字から逃げました。

楚辺は、奥間に避難せよとのことでしたので、楚辺から奥間まで夜通し歩いて行きました。

私達は、親戚のおじいさん、おばあさん、おばさんと子供達、十何人かが一緒に、馬車に荷物を載せて、昼は隠れ、夜になると歩きました。

馬車には、荷物とおばあさんと病気の人一人を乗せ、おじいさんが引いて奥間に向かいました。私の子供は一人でした。

奥間の避難小屋に着いた時には、そこにもアメリカ軍が上陸して来たので、今度は読谷の方に向かって南に進んだのですが、夜中に山道を歩くものですから、迷って元の場所に戻る事もよくありました。昼は隠れながら山の木が茂っている所から通りました。夜は川沿いを探して歩きました。

避難小屋には、どの位いたかはっきり覚えていませんが、その部落の人達は、避難民が少しでも畑の芋を取ったら「手榴弾を投げるぞ」と言って脅していましたよ。

私達は芋をお汁にしたりして食べました。芋のお陰で誰も栄養失調にならなかったし、また、喜瀬武原では、米を買いそれをお粥にして食べました。そうしているうちに、いつ頃か分からないが、恩納村の山で捕虜になりました。

私達は早い時期に捕虜になり、石川の収容所に連れて行かれたので、特にひどい思いはしませんでした。石川でも、栄養失調で亡くなる人が大勢いましたが、私達は誰も犠牲にはなりません。ただ父親の足が少し腫れたくらいのもんです。

(1990年2月9日採録)

# 十・十空襲そして恩納岳への避難

真玉橋 元

( 大正4年生、当時30歳  
喜名、旧姓金城 )

## 十・十空襲

その頃私の家の1階にも2階にもたくさんの兵隊がいました。

ちょうど7時頃でしたかね、私はお芋を炊いて、友軍の兵隊にあげようとしたら、パラパラと音がするんです。

「何ですかね兵隊さん」と言ったら「飛行場のほうで演習しているんですよ」「だけど今日の演習はちょっといつもと違って感じる感じです」と話していたんですよ。

ところがしばらくしたら、7時半か8時頃ですかね、今の喜名の公民館ですね、あの通りが焼けたんですよ。飛行場を爆撃するその飛行機が爆弾を落としてですね。「ウリヒャーナー あっちに爆弾が落ちていってよ」と言って、前もって消火訓練はしていましたから、みんなバケツを持って火を消しに行っただですよ。ところが消すどころの騒ぎじゃないです。すごい火で。

それで逃げようとしたら高山(屋号)のおばあさんが爆撃にあって焼け死んでいるんですよ、家の中で。怖くてそこには行けませんから、家に引き返してタンスから着物を出しておこうとしたら、私の家は二階建てでしたから、爆風でグラグラして入れないんですよ。いくらかは担いで防空壕に入れたら、9時頃には私の家の通りに来ているんです。私達の家が焼けたのは10時頃でしたね。今度は郵便局の方からこの通りへです。そうですね。現在の国道58号西側の

通りの西方面は全部焼けたんです。

私は女の子が1人いました。家族は父母と子供2人と私達母子の6人だったんです。どうしようかと思って、ふとんを出してきて庭に繋がっていたタビオカにかぶせてそこ下にもぐって、自分の家が燃えるのに消しにも行けないし、あれからずっとですよ、ずっと。

ここにはいられないから子供1人を連れて役場の壕に逃げようとしたら、途中でカラカラーと(戦闘機機銃の薬きょうの落ちる)音がしたので、隣の防空壕に入り込んで「助けて下さい。私達は役場の壕に行くつもりですけど...」と言ってその壕に入りこんでしばらくしてから、役場に行っただですよ。

そこには仲村渠栄秀さんがいました。「栄秀さん、私の家は焼けているけどどうしようかね」と言ったら「家族はどうなっていますか」「わからない」「じゃあ行ってみよう」ということになって、栄秀さんと一緒に家の近くに行ったら、その時は11時頃でしたかね、全部焼けていました。通りだけ焼けて、本部落の所はどうもなかったんですよ。謝花の二階建の家が最初に焼けました。郵便局からこの通りは十・十空襲で焼けていました。別の部落の被害についてはよくわかりませんが、喜名はそういうふうになんか十・十空襲の時に半分が焼けてしまいました。

そしてその日の夕方には、残った荷物を持って、長田の山に避難しました。その晩は山羊小屋に泊まり、翌日からその隣の山に防空壕を掘って、しばらくはそこにいました。

本部落は大きい家の軒には爆弾が積まれていました。牛山内(屋号)などは日本軍の爆弾が屋敷に積まれていました。十・十空襲からどれくらい後かはつきりわかりませんが、爆撃されてむら内も焼けたんですよ。

## 恩納村へ避難

私は役場職員だったので、最後まで喜名にいました。真玉橋（婿家）の家は十・十空襲で焼けましたが、実家が焼け残っていましたからそこで寝泊まりしていました。

娘は実家の父母と一緒に、昭和20年の2月に、国頭ではなく恩納村に避難させてありました。配給物資の関係もあり、恩納村の方に住民登録していました。家族は早めに恩納村に疎開させてありましたから、私は最後まで1人で喜名に残っていました。

そうしているうちに、役場にも解散命令が出たので、これは大変だ。明日、明後日にも上陸するかもしれないというものだから、3月29日の晩喜名を出ました。食糧物資はいつでも持ち出せるようにまとめてあったんです。味噌やら大豆やら、いろんな乾燥物等も作ってありましたから、それをもっくにたくさん担いで、歩いて恩納に向かいました。途中で警防団の方に山田の手前で会って「1人で歩いたら大変だよ」ということだったんですが、避難民が前にも後ろにもついていましたので、その方達もいるから大丈夫だと思い、夜通し歩いて恩納まで行きました。

恩納に行ったらあっちは悠々としているんですよ。「大変だよ。上陸するというからどこに避難しましょう」と家主の方に相談したら、恩納岳の下に行くというものだから、あっちの様子をよくわかりませんから「ウンジュナーガメンセーントゥクルンカイソーティンジクミソーレー（貴方達がいらっしゃる所に連れて行って下さい）」とお願いして恩納岳のふもとに行っただですよ。

恩納岳のふもとに行ったら、一時は大変静かで良かったんですよ。兵隊も通らないし。何十日もふもとの方にいたので、下に下りては芋等

を取って来てそこで生活していました。昼は暇だからみんな集まってしらみ捕りをしたり、椎の実を拾って来てゆがいて食べたりしました。そんなにひもじい思いはしませんでした。

恩納岳は陣地だから伝令も来ないんですよ。だから状況が全然わからないんです。

そのうちに艦砲射撃がひどくなりました。安富祖からも石川からも恩納からも艦砲射撃が恩納岳に四方八方から集中しました。大きい松の枝なんか無いくらいでしたよ。友軍はどれだけ死んだでしょうね。あちこちに穴が掘られて、恩納岳の上の方には死体が埋められていました。

私は役場職員だったので、役場から鉄兜と防毒面をもらっていました。避難した時実家の父に「これを持っていたらアメリカに会った時、戦争する人間と間違えられるよ。どこに捨てるか」と怒られましたが、捨てる所もなく、隠して持っていました。そして恩納岳に上って行ってから、包んで谷底に持って行って捨てました。

恩納岳に避難して20、30日した頃ですかね、下からアメリカ兵が通っているというものだから大変でした。下から艦砲は来るし、これじゃあここにはおれないから早く逃げようということになりました。

下の方からは逃げられないから、上の方、山の頂上づたいに行くと、人がたくさん集まっていました。

あの頃からは艦砲もしばらく途絶えていました。那覇や国頭あたりから来る人もそこに集まって、そこでみんな一緒に安富祖に下りましょうねということになったんですよ。

その前に、避難小屋に忘れものがあったので、それを取りに行った帰りに、山の中腹で4、5名のアメリカ兵に出くわしました。後ろには戻れないし、前にも行けない、どうしようかと思っ

ていたんですが、このアメリカ兵は担架を持っていた。殺されると思ったんですが、言葉もわからないから、勇気を出して笑って、御苦労様と言ってお辞儀したんです。そしたらその米兵達は「オーケーオーケー」と言っているようでしたが、私はもう生きた心地もしないで走ってみんなの所まで行きました。後で聞いたら、この兵隊達はアメリカの負傷兵を探して歩いていたそうです。

アメリカ兵が来たら大変だから下りようということで、夕方下り始めたんです。そしたら、那覇の人でしたが、家族に置き去りにされた年寄りがいいて、連れて行ってくれと言うんですが、私も5歳になる子供を連れていきますのでどうし

ようもなく、家族でさえ置いていくんだから仕方ないと自分にいいかせてそのまま進みました。夜なので川に落ちる人もいましたよ。川があると味噌がめに水を汲んできてみんなで回し飲みして、少し元気がでたらまた歩いたんです。夜が明けて川を見ると、友軍の兵隊が川に顔を突っ込んで死んでいたんです。それもたくさん、ずらっと。もう、死人の上からも渡って通らないといけなし、そうこうして、ようやく安富祖に下りたらアメリカ兵がそこに待っていて、荷物を全部取られ、そこで捕虜になりました。それから石川に移されました。

恩納岳の山中には50日位いました。

(1989年6月20日採録)



収容所で配給を待つ人々。

# 国頭疎開引率

長 浜 真 長

( 明治41年生、当時37歳  
長浜、屋号真長長浜 )

## 国頭疎開

十・十空襲後は時々空襲があり、昭和20年の正月あたりからはだんだん空襲が多くなって来ました。

昭和19年の末頃からは疎開するように言われていたと思いますが、疎開を実施したのは20年の2月頃からだったと思います。

妊婦や病人、年寄り、男手を兵隊にとられて子供だけが残ったりとさまざまな事情で避難できない人達も多く、みんななるべく自分の字にいたいということ でなかなか避難したがりました。

私は当時読谷山役場に勤めていて、国頭疎開の引率を担当していました。

軍からも早く避難するように促され、読谷では飛行場に近い喜名・伊良皆・親志あたりから先に避難しました。

読谷の避難指定地は国頭村浜から与那まででした。

読谷山役場を出発し、西海岸線沿いに行き名護の学校で一泊し、翌日は羽地の学校で一泊、3日目に国頭村に着きました。

宿泊すると、その婦人会の方が炊き出しをしてくれて、夕飯と翌日の朝ご飯、それに弁当を準備してくれました。

だいたい3日で国頭に着きましたが、夜通し馬車を走らせ1日で着く人もいましたし、元気な人達はみんなより先に着きました。逆に子どもや年寄りを連れている人達は、遅れがちでし

た。1日か2日で国頭まで着く人達の分も食糧の配給はありましたから、どこにいるか所在のわかる分については、晩になってからその人達のところに食糧を配りに行ったりしました。

## 疎開者受け入れ

疎開の引率をする時には、読谷山役場で名簿を作り、その名簿を持って行きました。国頭の仮役場でも名簿を持っていて、どこの誰はどこにいるということがわかるようになっていました。同じ字でも宇良に行く人もいるし、伊地に行く人もいました。1回に何人避難するというふうに決まっているわけではありませんでした。私は国頭村までの道案内と食糧の世話をしていましたが、3月の初め頃は疎開者指導員ということで、喜如嘉の学校にもしばらくいました。

読谷村と国頭村とは既に連絡がとれていましたので、連れて来た読谷村民を国頭の区長さんや各字の役員の人に紹介して「読谷のどこから何人来ました」という報告をすると、国頭の各字の区長さんが避難して来た人達の避難地での割り当てをしてくれました。そんなふうに入ればとても簡単でした。

奥間には読谷の仮役場があり、読谷からの疎開民の中心地でした。村長等もそこにおられ、いろいろな係もいて避難民の世話をしてくれました。

私は読谷から疎開地に移動するまでの世話係でしたので、村長が奥間にいらっしゃるということは知っていましたが、どこにおられるかは知らず、村長と話をすることもありませんでした。私の主な仕事としては、国頭へ疎開する際の食糧の確保と受け入れ人数の連絡等でした。

奥間にはターブクウ(田圃)があり、食べ物がたくさんあるということで、みんな奥間に

行くことを望んでおりました。避難指定地は字ごとに決められていましたが、早い時期に避難した人は避難地を選ぶことができました。

確か伊良皆方面の方達を引率していた時だったと思うのですが、大宜味村塩屋にはまだ橋が無くて、遠回りしなければならなかったんですが、子ども達が多くて大変だからと思って、船を借りて船で渡ろうとしたんです。その時空襲にあい、急いで船から降り、塩屋の学校の後ろの防空壕に避難させました。幸いケガ人はいませんでした、怖い思いをしたのでした。

最初の頃は、昼も移動できましたが、戦況が悪化し、読谷からの疎開率は2、3回しかできませんでした。

3月に入ると空襲が多くなり、3月28日頃からは、役場も解散してしまい行政もなく、指導する人も誰もいなくて、だんだんめいめい行きたい所に行くといった状況になってしまいました。

### 3月28日、読谷へ向かう

私は家族を国頭村字比地に避難させておりました。米軍上陸が近づいた3月28日には役場も山に引き揚げていましたので、私は国頭から家に置いてあった食糧を取りに行くために、読谷に向かいました。国頭から自転車で出発したのは、3月28日の午後4時頃だったと思います。

県道は中・南部から国頭に向かう避難民でごったがえしていて、子ども達はあちこちで泣き、着の身着のまま、悲惨な状況でした。私はその人達とは逆に読谷に向かっていました。名嘉真橋を通った時、米軍が上陸してきた時に道を遮断する目的で、友軍がその橋を破壊していました。破壊される前に、私はその橋を渡り、夜通し走って、谷茶に着いた頃夜が明けました。谷茶の丘から海を見てみると、谷茶から長浜の海にかけて、米軍の艦船がたくさん並んでいる

のが見えたので、びっくりして谷茶の防空壕に戻りました。谷茶の部落には、アメリカ軍の飛行機が低空飛行でガソリンを撒き、その後に曳光弾を落としました。そうですね、半時間か1時間くらいで部落は全て焼き払われてしまいました。

私は村はずれの防空壕に入っていましたが、そこにおじいさんが逃げてきたので、その人と一緒に山の方へ逃げ、その晩はそこに泊まりました。

米軍の上陸は4月1日といわれていますが、3月29日頃私は真栄田岬で米兵を見ました。終戦になってからアメリカから聞いたのですが、残波から上陸した兵隊もいるそうです。軍艦から網を投げて引っかけてそれから上ったということです。

そして翌日29日の晩、私はやっと家に着きました。長浜にはカンジャーガマとウフガマという洞窟がありましたので、長浜に残っている人達はそこに避難していました。その晩、長浜のティランヂチ（地名）に上って海の方を見ると、そこそ歩いて渡るくらいの上陸用舟艇が集結していました。先に上陸してきたアメリカ兵が電話線のようなものを張っており、それに何かがひっかかるとめくらめっぽうに撃っていました。その29日の晩、長浜のティランジュ（地名）でカンカンカンと音がして、次は喜名のヤマタイモー小（地名）そして楚辺の方と、3カ所で同じようにカンカンカンと音がしました。するとまためくらめっぽうに撃ってきました。その線に何かがひっかかったんだと思います。

妻の親が現在の与久田ビーチの近くの壕にいましたので、30日の晩は、そこに泊まりました。飛行機が低空飛行をするのを見て、友軍の飛行機だと思いこみ、戦は勝ったのだと、壕の中で話し合っていました。そして壕から出てみると、

戦車のキャタピラの音がしました。友軍の戦車だと思ったらアメリカの戦車だったので、大変だと思いました。その時、壕の中にいたある男の人があわてて壕の中で立ち上がり、岩に頭をぶつけてケガをしたのでした。

国頭なら大丈夫だから、国頭に行こうということになり、壕を出ようとしたのですが、攻撃がすごくて壕から出ることはできませんでした。どうせ死ぬなら宇加地でと思い晩になってから宇加地に向かったのですが、さらに喜名まで行きました。宇座の長浜小（屋号）のヤッチーともう一人と私の3人で鎌を持って、宇加地から喜名に向かう川沿いを辿って行きましたら、線に融れたらしく一斉射撃を受けましたが、何とか3人とも無事でした。そのあたりには海軍の壕があり、米や食糧はいっぱいあるのに人は1人もいませんでした。座喜味の東の防空壕に行ったのですが、そこにも誰もいませんでした。こんな所でウロウロしては大変だということでもた宇加地の壕に戻ったのでした。壕の中では、儀間の呉屋（屋号）のおじいさんが、クルジナーを着て、帯で刀をしばりつけていました。そこに私達が帰ってきたものですから、びっくりして「真長、イッターヤマーンカイジャガ（貴方達はどこに行っていたのか）」と聞くので「ワッターン ナートーイーヌムン イクサヌ ティーガネーシーガンジャピタン（私達も貴方と同じ、戦の手助けをしに行ったのですよ）」と答えました。

#### せんぶへい 宣撫兵

4月1日の朝、長浜や宇加地に残っていた人達は捕虜になったそうです。私達はみんなが捕虜になったのも知らずに、その晩宇加地の壕に戻りましたので、捕虜になったというわけではありません。

その日の朝捕虜になった人達は翌日の朝、長浜はナカジョウ（屋号）の屋敷と公民館の2カ所に、宇加地は浜に集まるように言われ「アチャマディヌヌチルアル（明日までの命だ）」と泣いて泣くわけですよ。みんな集められて殺されると思ったようでした。

2日くらい後に私は家族を迎えに行こうと思いい、仲泊の方まで行きました。アメリカ兵にも会いましたが、彼らはどうもしませんでした。彼らは宣撫兵のようでした。宣撫兵は一線部隊とは違い攻撃してきませんでしたので、安心して道から歩いていました。ところが仲泊あたりで、機関銃を持ったフィリピン出身らしい兵隊に呼び止められました。私はその頃38歳くらいですから、兵隊と間違われたら大変だと思い、彼らが来るのを待っていました。どうするのかと思っていたら仲泊の山の方に連れて行かれました。そこにはたくさんの黒人兵がいました。宣撫兵の中には黒人はいなかったもので、その時初めて黒人を見ました。それから二世が来て、どこに行くのかと聞かれたので、国頭に家族を迎えに行くと言いましたら、国頭はまだ占領していないし、宣撫兵もいないから危ないと言うのです。それから、彼は私が兵隊ではないというような証明書をくれました。それから黒人兵に付き添われて、元の道まで戻りました。道から歩いてたら大変だということでしたので浜の方におりて行って歩いていると、また別のアメリカ兵に呼び止められました。さっきもらった証明書を見せたら帰してくれました。そしてアメリカ兵に会ったらこの証明書を見せなさいと言っていました。

（1989年6月20日採録）

# 妹を背負い山中彷徨

波 平 次 枝

( 昭和9年生、当時11歳、座喜味  
旧姓松田、実家の屋号大名護小 )

## 国頭へ疎開

父の正和は満州から帰って来た直後の昭和19年12月に座喜味の区長になりました。疎開命令は出ているが、字民はなかなか疎開したがらず、区長の家族である私達一家は率先して疎開することになりました。

昭和20年の2月には山原に疎開するという事になっていたので、2月13日に私の家では、疎開中の食糧にする保存用の油ミソ等を作るために豚を潰しました。

疎開の準備で忙しかったその日、14歳だった姉の栄子は、家の池で芋を洗っている時に癲癇の発作をおこし、その池で亡くなってしまいました。翌日葬式をおこない、あわただしくナンカ（初七日）までは済ませて、父は区長なので座喜味に残らなくてはならず、母と私達兄弟4人は翌日山原に向け座喜味を発ちました。

その頃は恩納までも行ったことはありませんでした。2月21日の朝初めてそこを通りました。

多幸山の手前のシチャマダのあたりには、日本軍の1人しか入れないような避難用の、小さな壕が掘られていました。それまではあまり座喜味から出た事もなかったのに、そんなものがあることも知らずにいました。

その時までバスも見たことは無かったのですが、バスが私達を追い越して行きました。その時兄が、「新垣ヒラオバスだ」と言っていたのを覚えています。その頃比謝・大湾・比謝江に親戚がいたので、県道を歩いてそこに行くこともあ

りましたが、バスは見たことも乗ったことも無かったのでそれがとても印象に残っています。

シチャマダから山田、仲泊を通して安富祖の学校で泊まりました。

そこではたすきをかけた婦人会の人達が夕食のおにぎりや味噌汁を作って待っていてくれました。それを食べて寝て、翌朝は朝ご飯を食べ、お昼の弁当まで持たせてくれました。芋ではなくご飯だったのでとても嬉しかった。大人ならば夫や息子を戦争に行かしたという苦しさがあったかも知れませんが、私達はまだ子供だったので、避難するといってもどこに行くのかもわからないし、朝から晩まで米のご飯が食べられ、見たこともないバスをみたりして遠足気分でした。

私達は馬車で避難しました。兄は当時18歳で、どこで手に入れたのか地図を持っていたので、ここはどこの部落と教えてくれたので、その時途中の部落の名前を覚えました。

そして安富祖で一泊した後、翌日は羽地の学校で泊まりました。そこでも婦人会の人達が食事を作ってくれました。翌日羽地を出発し、大宜味村の塩屋には橋がかかってなかったので、そこを一里ワタマイといって遠回りしました。

## 疎開地辺土名

座喜味を出発して4日目に奥間に着きました。ところがその受け入れ名簿には私達の名前が無かったので、桃原に行きました。そこで兄は私達を降ろして座喜味に戻って行きました。母と私達だけが残り、桃原の浜で遊んだりもしました。私達は全くピクニック気分だったのですが、母は心配で桃原の事務所に問い合わせたら、その名簿にも私達の名前は無いということで、今度は辺土名に行きました。よくわ

からないのですが、辺土名の名簿には名前があったらしく、その高山という家に割り当てられて、そこでは配給をもらいました。

2月ですからその頃はまだ空襲も激しくなく、母も働き盛りだったので、その家の畑に出たり山に行ったりして手伝いをしていました。ひと月くらいは私達も畑と一緒にいたり、隣の奥間や桃原まで妹を背負って遊びに行ったりしていました。わりと平和で食糧の配給もあり、食べる物にもあまり困りませんでした。

私は辺土名の学校には通わなかったのですが、金城マサ子という先生が、同じ高山の家を借りていたので時々学校に遊びに行ったりしていました。

上又前宇座（屋号）の宇座富美先生達が、私達より先に疎開していて、その後1家族とか2家族とかそれぞれやって来ました。疎開の時期が早かったので、その頃は一緒にたくさん疎開してきたのではありませんでした。川平（屋号）も馬車で来ていました。

こうして座喜味の人が疎開して来ると「今日は登殿内（屋号）が来たってよ」とか「今日は川平（屋号）が来たってよ」とか「亀池根（屋号）の山城亀吉さん達が来たってよ」とか言って会いに行ったりしました。

兄は馬車を持っていたので、中城まで芋を買いに行き、辺土名まで運んで来ました。2月から3月の間に2回か3回位は往復したと思います。

兄は18歳でしたから、いつ防衛召集されてもおかしくない歳だし、途中で何があるのかわからないので兄が中城に行く度に、母はこれが最後の別れになるのではないかと泣いていました。私はまだ子供でしたから、何故泣くのかわかりませんでした。兄が中城から帰って来ると芋が食べられるので私達は手を振って見送りました。

3月になってからでしょうね、辺土名の海で機銃掃射があったということで、海岸にいた人達が戻って来たのを覚えています。

辺土名では上又前宇座と川平と私達の3家族で、上又前宇座のいた近くの桑畑に地下壕を掘ってありました。

## 父も辺土名に疎開

空襲もだんだん激しくなってから、父が読谷から辺土名に来ました。辺土名にも空襲が来るようになったので辺土名山に登ることになりました。

山に上ってからは食糧はほとんどありませんでした。4月、5月頃はちょうど山莓の時期なので莓を探りに行ったら、アメリカ人が「カマー、カマー」と言っていたと言うんです。私の母は名前がカマーなので「アメリカーガ カマーディイタッサー ナーデージ リカクマカラヤヒンギラ（アメリカ兵がカマーと私の名を呼んだ。もう大変だからここからは逃げよう）」ということで山奥に逃げることになりました。

辺土名山から比地山に向かう山道では、たくさんの人がそろそろと歩いていて、その中には座喜味の人もいました。山中は大木が茂っているので昼でも歩けたのです。

与那覇岳を通った時に山に雲がかかり、母が「頭を雲の上に出し…」と歌っていたのを覚えています。

その頃からは父も兄も一緒だったし、母の兄さんの奥さんとその子供2人と、父の妹の家族も一緒でした。

そこら辺では、軍隊からはずれた日本兵達もたくさん見られました。沖縄で防衛隊に召集されていた人達も、家族を探して中部あたりから国頭まで来ていました。

## 大和魂

みんなは川田・平良（カータ・テラ）に行って東海岸に出て、中部に近い所に行くとか言っていました。私達は父も40歳そこそこでしたし、兄は18歳でしたから、いつも大和魂の話ばかりをしていて、自決はしても捕虜にはならないということで高江・新川（タキイ・アラカー）に行きました。

6月頃だと思いますが、そこで初めてアメリカ兵を見ました。従姉妹と海に藻を採りに行った時です。赤い体で、身長も高いし、鼻も天狗のようで、そんなアメリカ人を見て、本当にびっくりしました。それでここには捕虜になるということで、翌日急いで安波に戻りました。

## 妹を背負い山中彷徨

妹の敏子は、小さい頃から体が不自由でした。高江・新川で、捕虜になってそこから逃げて来たおじいさんが、妹を指差して「クングウトウグワナ アメリカーガンジーネー インヌムンルナイサ（アメリカ兵がこの子を見たら犬のえさにしてしまうよ）」と言ったので、母はそれを聞いて絶対に捕虜にはならないと決めたと後で聞きました。

食べる物もほとんどないのでおっぱいも出ないのですが、くわえさせないと泣くのでくわえさせていたら、乳首を噛み切られたりして、母も苦しかったと思います。母が一番下の幼い記伊子の面倒を見るので敏子の世話は私の役目でした。

敏子は歯も丈夫じゃないので、ヘゴ等も食べることができず、くわえさせておくと1日でもくわえたままでした。

私は12歳、敏子は5歳くらいでした。私はあまり大きいほうではないし、敏子は身長が高

かったんで、おんぶすると引きずるような感じでした。ずっとおんぶしているので辛くて、歩きながら「ウヌクワヤシティーンドウ（この子を捨てるよ）」と母に何度も言いました。私にとって妹は人間というよりも重い荷物としか思えなかったのです。その時に母が自棄になって「イーシティレー（捨てなさい）」とでも言おうものなら、すぐおろしたかもしれません。ですが親はそうは言わず、「ナーイヒグワールヤンドー（もう少しの辛抱だよ）」と言うので私もそうかと思っておんぶして歩き続けました。

とてもひもじいし、疲れるし、いろいろあるので、妹が背中で泣くと、痣になるほど妹のをもをつねったりしました。自分のことで精一杯でかわいそうとも思いませんでした。この子に分けられた食べ物でも、自分が取って食べたいくらいでした。

その頃は米を炊くこともできなかったんで、母は水につけた米を嚙んで記伊子に食べさせていましたが、私も母がくれるその米粒を食べるのがとても楽しみでした。

山の中を歩く時も、大人の早さと子供の早さは違う上に敏子をおんぶしているので、母達は先に歩いて、その後をおかけました。私達はいつもみんなより遅れていました。道が別れている時は、母が草の葉を結んだりして目印を作っているんで、それについて歩いて行きました。母達は私が追いついて来るまで休んでいて、やっと母に追いついたと思ったら母達はまたすぐに歩き始めて、休むことができませんでした。それでも塩やスク小をほんの少し渡されて、それだけでまた歩き始め、喉が乾くと足跡のくぼみにたまった水を飲みました。

父は栄養失調で体が腫れていました。兄は痩せていましたが元気でした。

父の妹の家族と母の兄の家族も一緒だったのですが、たくさんの家族が一緒だと食べ物が無

いということ、女所帯だから捕虜になってもいいということで高江・新川で別れました。

私達は父も兄も大和魂を貫くということでさらに奥へ奥へと逃げました。私は12歳でピンピンとび跳ねるような年頃なのに、宇良あたりに来た時には杖をつかなければ歩けないくらいになっていました。骨と皮だけになって関節だけが目立ち、それだけの体力しかありませんでした。

## 投 降

山の中では、捕虜になったら御馳走がたくさんあるとか、いろんな情報が流れました。捕虜になったら1日1合の米の配給があるというのを母は聞いたらしく、敏子の事が気がかりだったが、捕虜になることを決心したといえます。だんだん痩せ細って行くのを見て「ウマウティシナスシヤカー クミヌムヌチュチブヤティンカマチカラアメリカーガインカイキーンリチソウティイケーカラーシムサ（ここで死なせるよりも米の一粒でも食べさせて、それから犬の餌にするというのならそれでもかまわない）」とまで思い詰めていたそうです。

父と兄は捕虜にならないと言っていました。が、「ワッタービケーヤティンシムグトゥ 辺土名山マディヤソーティイジトゥラシ（私達だけでも捕虜になるから、辺土名までは連れて行って）」と言われ、父もついて来ることになりました。兄は「ワシターグーヤ兵隊ンカイジョーンシンウグトゥ ワカリラ（私の同級生達は兵隊に行っている者もいるいだからここで別れよう）」ということで、兄とはそこで別れました。父は辺土名山までも連れて行って戻るよりはということで、一緒に山から降りたんです。

私達が安波から手をあげて降りたのが8月15日でした。

## 辺土名地区収容所へ

安波から辺土名まで2日か3日かかりました。

兄は自分の食糧を探すため、辺土名山に蘇鉄を採りに行き、そこで捕虜になったということです。

安波から宇良に降りて来た所に陣地があって、アメリカー達は川のほとりにいました。アメリカーはシーレーションをくれたので、それを開けて食べました。何とも言えずおいしかったです。こんなおいしい物を食べて後だったら死んでもいいと思ったほどでした。

宇良でシーレーションをもらって、歩いて県道に出たら、GMCトラックに避難民のカンパンシンカが乗っていて、出罐に水を入れて運んでいました。私達はこれから降りて行くのに、この人達は既にカンパンで働いていたのです。

宇良から辺土名に行って、辺土名から喜如嘉に戻って行きました。その時喜如嘉に向かっている車に乗っている人が一生懸命手を振っていました。私達は足も腫れてやっと歩いている状態だったので、車に乗っている人を羨しいと思っていました。母は、それが兄だったことを知り、「ワッター万蔵ヤタン。カチミラッティクルサリーガン（うちの万蔵だ。捕まえられて殺されるんだ）」と思ったらしいが、歩いて喜如嘉の収容所に行ってみると兄は先に着いていました。

収容された人達は辺土名地区といって喜如嘉、謝名城、田嘉里の各部落に配置されていました。私達は田嘉里の本部屋という家に割り当てられました。途中で離れ離れになった父の妹の家族も、母の兄の家族もみんな田嘉里に収容されていました。

田嘉里では米や缶詰の配給もありました。割り当てられた家の一番座に私達が住み、二番座

には宇良の人が住んでいて、家主は裏座や台所に住んでいました。炊事場小といって、ご飯を炊くのは家畜小屋でした。

## 羽地へそして石川へ

配給があるといっても石川あたりのようにたくさんあるというわけではありませんでした。両親が芋掘り作業に行つてカズラ等をもらつてきたりしていました。

8月に山から降りて、10月頃まで田嘉里にいました。10月の台風の日でしたが、昼だと捕まえられるので、夜中にそこを出て、羽地に向かいました。

私はずっと敏子をおんぶしていて、いつでもみんなより遅れていました。山の中では、敏子の食べ物も取って食べたいくらいだったので、私は人間ではなかったと思うのですがその頃からは少し食べ物もあるし、敏子が可哀相と思うようになっていたので、私も少しは人間らしさを取り戻していました。煎った<sup>えんどう</sup>豌豆を敏子に食べさせながら歩いていました。

ちょうど、大きなアルミの鍋があったのでそれを二人で帽子のように被って、台風の雨の中を歩きました。夜通し歩いて、仲尾次あたりに来た頃、夜も明けて風も止んでいました。

私達が辺土名に行く時には全然無かった水陸用の戦車が海にたくさん浮んでいました。本当に歩いて渡れるほど、小学校の3年生くらいの時に習った「因幡の白うさぎ」を思い出しました。その辺には三角テントがいっぱい張られていて、収容された人達がいっぱいいたと思います。私達は鍋を被って汚れた恰好をしていたので、そこの子供達に石を投げつけられました。

親達は知り合いのいる羽地・田井等に先に行つていて、そこに着いてから私達を迎えに来るつもりだったらしいのですが、私達は途中で照

屋寛一郎さん達と会いました。鍋を被って歩いている私達を見て可哀相に思い、声をかけてくれて、照屋さんの住んでいた家に連れて行ってくれました。その時食べさせてもらった物はとてもおいしかった。

私達がその家にいる間に、両親は探しに来たが、どこにもいないので、我部祖河あたりまで探しに行ったということです。

私も、それまではがんばって歩いていたのですが、照屋さんの所で一旦休んでしまったら、歩けなくなってしまいました。

その後、やっと親が探し当ててくれて、担がれて羽地に行きました。幼い妹達がいて母は私にかまうことができませんでしたので、それまでの疲れと栄養失調で、1週間くらいはトイレにも行くのもよつんばいで行くような状態でした。

羽地に行つてからは、芋の配給もありました。早い時期に捕虜になった人達は、食べ物もあって体力も回復しているようでした。私達は3月から8月まで5ヵ月くらいずっと山の中を彷徨っていて、やっと落ち着くと思っていたのに、すぐその田嘉里からも移動して無理をしていました。

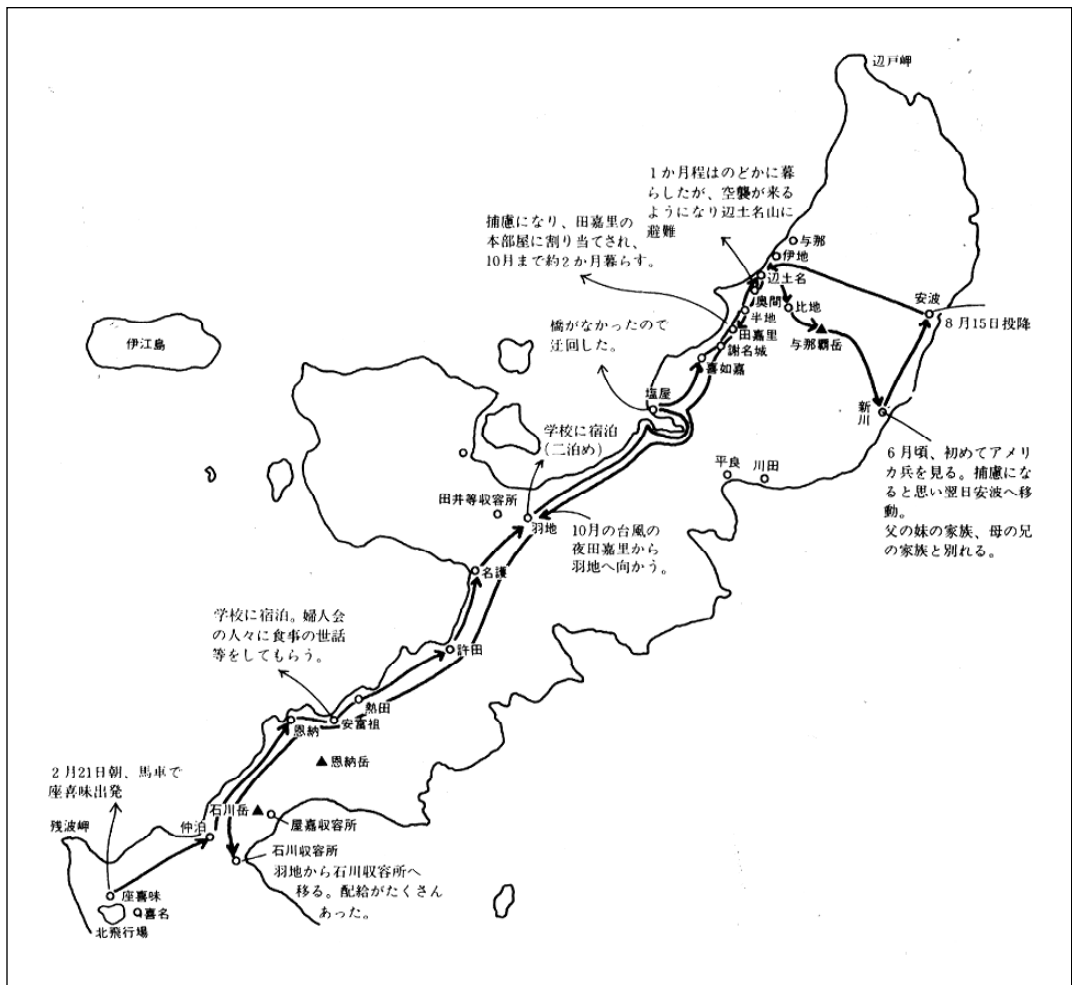
兄は、羽地から先に石川のカンバンに行き、その後私達も石川に行きました。石川に行つてからは配給もいっぱいありました。

二度とこんな経験はしたくありません。

(1990年5月21日採録)

## 波平次枝さんの避難経路

### 及び捕虜になってからの移動図



# 大湾の壕から国頭へ避難

宮 城 元 信

( 大正14年生、当時20歳  
大湾、屋号友寄 )

## 大湾での避難壕

戦争初期は屋敷内に家族用の縦穴式の防空壕を掘って日中はここで過ごしていたが、段々ひどくなるものだから、家のあるところではあがないということで長田の山に入ったわけです。

後で聞いたのですが、当時わたしの家には日本軍の炊事場があって、裏には医務室もありましたし、すぐ近くの高射砲のところには司令官吉田清というのがいて、狙われているということなんです。

長田の茶園近くには大きな壕がありました。それは米軍が北飛行場の攻撃のために落下傘で東側に降りるだろうことを想定して、日本軍がその要撃のために掘ったもので、中には大きな松の坑木が入っており、しかも厚みがあって直撃を受けても大丈夫そうでした。その壕には外からは見えにくいように銃座があり中から攻撃できるようになっていました。しかも、掘りとした土はその周辺には積まずに遠い所まで運ばれていました。ちょうどカニの巣に土盛りがありそれとすぐ分かるようにはなっていないということです。そこに入っているとぎつぎつに地元の人が入ってきました。

3月26、7日の朝、中（嘉手納）飛行場から日本軍の飛行機がずいぶん飛び立って行くのがその音で分かったのです。

それからしばらくして艦砲、高射砲、飛行機の攻撃の音がまったく聞こえなくなり、その時は友軍が敵をやっつけて本土または台湾の基地

に帰ったのだと思いました。我々は疎開もしないで助かった、家にも帰れるということでしたら、午後から赤トンボと呼んでいた米軍の偵察機が飛び始め、飛行場の方に艦砲が激しくなっていき、この避難壕にもどんどん艦砲が落ちてくるようになっていました。ちょうど川沿いにそんなに遠くに外れもせず正確にビシャリビシャリと20m間隔で2つずつ落ちてきました。

そして艦砲がやんだあと部落に帰ったのですが避難するときはきれいな道だったのに帰りは艦砲で凸凹になり、木はなぎ倒され道をふさいでいました。道々「戦というのはこんなもんだ」と誰かがいっていました。

家にもどり中に入ろうとすると、家がゆがんで戸が開かないので台所の方から壊して入ったのでした。裏に回ると直径がゆうに2mはあった松や1.5mあった赤木が根こそぎひっくり返っていて周辺の岩は真っ白になっていました。そんな時日本兵らが二階の倉庫から日本軍の食糧を運びだしにきていました。島尻、首里に陣地構築に行くというのでした。高射砲では役にたたないということで対戦車用の地上作戦に移るということでした。

それから立ち退き命令が出たのですが、家財・食糧を全部もって行くことは出来ないので鍋やムシロ・丹前などの他、食糧として砂糖・豆・塩等をもって避難しました。

27日の晩に大湾の皆さんが揃って国頭に避難するということで、津波古の前に集められましたが激しく雨が降っておりました。お年寄りには馬車に乗るようにということであったが祖母は当時77、8歳になっていましたがもっと年輩がいて歩くことになったのでした。

そのとき避難しないということで残ったひともけっこうおり、その人達はすぐに捕まり楚辺の収容所に収容されたようでしたが、その後に

日本軍の空挺部隊の攻撃があり危険だということとで別に移されたということです。

## 名護の幸喜へ

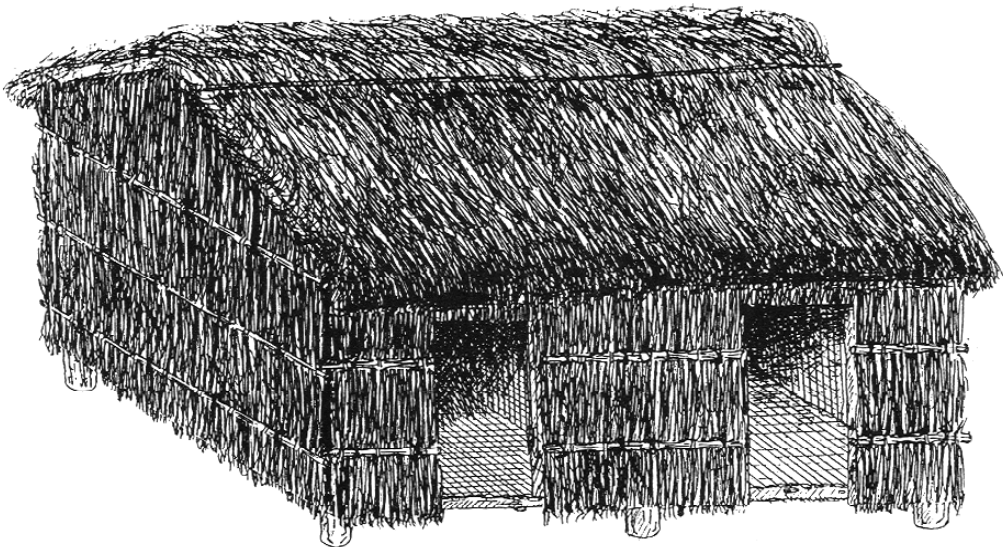
私達家族は最初は名護の幸喜に行きました。大湾を出発し、恩納で1泊して2日目に幸喜に着きました。なぜそこに行ったかという、戦前名護の幸喜出身で私の家の一番座を借りておられてた先生がおりました。その人が是非国頭避難の際は幸喜に来てくれということで、ちゃんと友寄（屋号）の避難小屋と避難壕が準備してありました。

その先生が「元信君、戦争は長期戦だからここで田んぼも耕し、稲も植えて頑張ろうね。そのために田んぼも準備してあるよ」ということでありました。

それではお願いしますということで、田植もして過ごしましたが、3月30日頃その民家が空襲でやられて、畜舎の牛が死んでしまいました。

その主人が大事にしていたいい牛で、その主人は泣いていました。それでしかたがないということで肉だけでもとろうということでつづいてアンダンスー（油みそ）をたくさん作り、これはあなた方の分といってたくさん分けてくれました。

私は4月1日の現地兵役召集を持っていたものですからじっとしておれず、こうこういう理由で国頭村奥間の仮役場にいかないといけないということで祖母はそこに置いて、母と妹の3人はそこを後にしました。許田にさしかかるとその橋は米軍を通すまいということで日本軍によって破壊されていました。そこでたくさんの避難民が立ち往生しているわけです。それでも干潮になってなんとかつかまりながら渡り、そして名護に行きました。その時はもう4月に入っていましたから名護地域にも艦砲が激しく、ひどかったですね。しばらく行くと巡査が立っていて「どちらにか。本部か。国頭か。」と聞くので「国頭です」と答えたら、ここから



避難小屋（国頭村でのききとり調査による複製図）

行きなさいと案内してくれました。名護を越えてからは昼でも歩ける状況でした。塩屋湾もずっと迂回して、奥間についたのは夜の9時頃でした。こうして国頭のほうに行ったわけです。

## 避難地に着いて

そこでは、ありがたいことに係の人が待っていてくれて「よく来たね」ということで一人いくらということで配給の切符をもらい、何号の避難小屋にということで山に行きましたらちゃんと避難小屋が造られていました。

しかし、避難小屋にいたのもほんの2、3日で、4月2、3日にはあつというまに米軍がやってきました。それで三々五々更に山奥に逃げ込んで、少ない広場に竹などで日陰をつくりそれぞれ大湾、古堅、渡具知と部落ごとにある程度まとまって生活していました。

馬をつぶしたという話があり、渡具知の若者が食糧をさがしにということで、3名が出かけて行ったのですが、その途中でアメリカ兵に出会い殺されたということでした。そのことが大湾の人々の間に伝わり、更に逃げないといけないうことになったのです。その翌日一緒にいたおじいさんが芋を掘りにいってアメリカ兵に出会い、老人ということで殺されはしなかったのですが道案内をさせられ大湾の人たちの隠れているところに連れてきたのです。アメリカ兵は威嚇のつもりだったのか銃を撃ったので、すぐそこまで「チョーンドー（来ている）」ということで蜂の巣をつついたような大騒ぎとなりました。

我々は銃声が聞こえたものですから家族をつれてすぐ前の藪の中に飛び込んだのです。撃たれたらすぐあたる所でありました。右往左往しているので中にはアメリカ兵の所に逃げるものいる始末でした。しかし、幸いそこでは犠牲者

は出なかったです。

この蒲上地小のおじいさんの事は語り草になっていますね。反対側に連れて行けばいいものを、人間というものはけっこうそをつけない訳なんでしょうね。それでこのおじいさんも命は助かっていますよ。「ウンジョームノーウマーン」ということを言うと「アンシ カチミラッティ アッキンリル イヤギールムンヌ」ということでありました。捕まったものとしては歩け歩けといわれて歩くしかなかったわけなんですね。

山中では例えば、古堅の波平定吉さんとか6、7世帯一緒になるのですが、離れてはまた一緒になるというぐあいですと一緒ということにはなかったですね。特に私たちの家族は従兄弟にあたる赤ん坊も2、3歳の子供もいて、ひもじくてもなんにしてみしょっちゅう泣くものだからみんなから嫌われていました。敵に見つかりやすいということで敬遠されたわけです。ですから、できるだけ単独行動を心がけました。

## 国頭山中から久志へ

この比地の山では危ないから、南へ下りようということで、南に向かって歩き始めました。その途中で1個小隊に会いその陸軍少尉に比地の情報をお話しして、互いに頑張れということで別れましたら、そのすぐ後にバラバラと銃声がしましたから、この部隊は敵軍と遭遇し、切り込んでいったんでしょう。我々は南へ南へと山道を急いで逃げて行きました。

山の避難小屋と麓の畑の間は避難民が歩くので自然に道になっていたのですがそこには家族とはぐれて歩けなくなった7、80歳ぐらいのお年寄りが点々と栄養失調の状態で座り込んで「芋ちょうだい」といっているのですが、あの時は自分の命もどうなるか分からないときです

からね、気の毒ではあるけれどもかまっておれないのが実状でした。非常にしのびない場面に何度もであいました。

大湿帯にはたくさんの避難民がいました。我々もそこにいて芋を掘ったりして生活をつなぎました。そこで親戚のおばあさんが栄養失調で亡くなりました。そのおばあさんをそこに葬って我々は久志に移動しました。

久志の山は米軍の野戦缶詰やタバコなどがあちこちにあって近くに米兵がいることがすぐ分かりました。許田線を突破するため久志岳を下りていくと、ちょうど叔母が先になってそして妹、母、私の順でしたが、途中目の前に大きな軍用犬のシェパードに出会って、その犬は今にも飛びつこうとしているわけです。軍用犬は首筋を狙ってくるからと棒を握って、緊張していましたが、しばらくにらみ合いになり、犬の方が引き返して行ってしまいました。米軍も一緒にいるはずだから、すぐ藪の中に逃げたのですが叔母が逃げそびれてしまいました。

その上の方には東風平の人たちの避難小屋があったのですが、そこでバラバラと銃声がしてけがをしている男性は撃ち殺され、そこにいた女性はみんなつれていかれました。途中で鉢合わせになった芋掘り帰りの女性達も連れていかれました。

この久志岳には村上隊という護郷隊がいるということで米軍はそこをポイントに警戒していたのです。前の男性達もその村上隊ということでやられたと思われます。皆もそんな厳重な警戒体勢の中にいたわけですね。我々はタンガマというところに潜んでいました。そこはとても見つけにくい場所で妹と避難しておりました。

## 山を下りる

母は自由に山を登ったり下りたりしておりま

したが、村の状況を聞くと、いよいよ明日は久志岳掃討戦で戦車や飛行機でやるということでした。兵隊も登って来るという情報もあるし、このままではどうしようもなくここで死んでもいいさということであったのですが、母が泣いてとにかく一緒にということで明日は朝からの攻撃ということでじゃあ下りようということにしました。母の願いというのでしょうか、あれがあったから今生きているわけです。そして久志小に下りたところが私の後輩の家だったのですが、村には学校もできていて、人もいっぱいいました。6月27、8日になっていました。缶詰に芋をいれて、その芋の汁で過ごし、まるまる3ヵ月間山の中を歩いていたわけです。

山を下りると納屋に入れられ、この部屋には大湾の当山平治さんがおりました。奥さんはすでに看護婦として働いておりました。私たちが来たということでもとても喜んで迎えてくれました。各家に敗残兵がいらないかとMPが昼中巡るのですか、その情報が入るとすぐ納屋にはいり藪の中へ隠れるのでした。納屋の中はそのころ真夏の6月でしたから大変でした。MPが外から顔をのぞかせるのですが暗いものだから気が付かないで行ってしまいました。4、5日はそこで過ごしました。当山さんは巡査をしていたので、区長の山城さんと連絡をとりました。当時は区長をメイヤーといっていました。そこで当銘という校長先生に連絡をとったら、その校長のいうには、心配せずにすぐ出てきなさいということで、しばらくは調査があるが心配ないということでした。私は国に反抗することになるのではないかというのが当時の気持ちでした。そういう教育を受けていたのですから。

## ミヤランシン収容所

翌日校長先生が迎えにきました。MPがトラ

ックできて、私を連行しに7名くらい来て、私はその時20歳くらいでしたが相手の体は倍くらいに見えました。鬼というのはこんなものかと恐かったですよ。その服装を見たら自動小銃、手榴弾、短刀、拳銃と武装をしていて一言も言わず連行していかれました。捕虜の取扱いはどうかと心配でした。日本であればすぐ銃殺とかいろいろあるから、そういう風になるだろうと諦めていました。そのキャンプについたら中に人がいっぱいいたのですがそこではなく、鉄条網の張り巡らされた金網のなかに連れていかれました。

一般住民は久志小にいましたが、私は久志のミヤランシンという収容所に入ったのでした。この収容所は島尻方面からの避難民が辺野古の先の上陸用舟艇SLTで上陸するのでそこに造られたようです。ミヤランシン収容所に収容されるのは主に戦闘員で収容人員は200名くらいでその中には病院もあり、島尻からの負傷兵を連れてきて治療していました。他に炊事場や東西に仮墓地があり、有針鉄線の金網に囲まれていました。入り口の銃座は県道の方を向き久志の山にいた村上隊の夜襲に備えて非常体制をひいていました。

それで夜の8時から6時まで地域周辺を歩いてはいけないという厳戒令のようなものがありました。ある日、その禁を破った老人がやられました。内蔵が全部外に出てしまったのでした。沖縄の人が瀕死の状態のその人を病院にかつぎ込んできましたが、命に別状はありませんでした。

この収容所に連れてこられる人は、日本軍でないかどうかをまず調べる事が一つで、沖縄県の人だと軍関係ではないかということです。我々がそこに入れられたのはそんな疑いをもたれたからでした。

M Pが水や食料を運んでくるのですが毒殺さ

れるとばかり考えていました。食事を受け付けないものだからそのまま衰弱していくのだなと思っていました。食事を持ってきたM Pの腕章をつけた者が「ブリーズ、ブリーズ」といって自分も食べてみせたりしたのですがそれでも食べませんでした。しばらくして私よりも2、3歳年上の山城という地元の青年が連れてこられました。兵隊と疑われて来ているのですが、「一緒に死にましようね」ということで死を前提にいろいろな話をしました。夕方、その人の甥姪が地元にいるものだから面会に来るわけです。食糧をもってね。芋煮とか豆腐ンブシーとか当時としては高級料理でした。それをもらってたくさん食べました。

翌日からはC I Cという調査が始まったのですが、調査はまず英語でそして日本語で更に琉球方言でという具合でした。調査官は広島系の木村という人、朝鮮系の森本という人、沖縄系の具志堅という人の3名が調査に来るわけです。まず本土出身か沖縄の出身かを調査するわけであるが「イッター アンマーヌ カン イータンロー」というと「トー マーンジ アイビータガ」と答えるわけです。そうすると沖縄出身ということが分かるという具合です。

沖縄の青年にしても防衛隊、護郷隊に入隊していてもおかしくない年齢であるということできびしく追求してくるわけです。木村という調査官は日本語でしました。学歴、軍隊経験等の調査をするわけですが、配属将校、教理教生は誰だったか。また軍隊教育は5年受けていて、特別幹部候補にも合格しており軍隊にいけばすぐ将校になれるというふうでした。ところが4月の現地入隊という形であり、入隊できなかったのは沖縄戦のためであるということ云々を調べられたわけです。

木村というのが最後まで私をジャパニー（日本人）で沖縄人ではないと言い張っていました。

言葉が分かるのは沖縄に来て帰化しているのだ  
といい信用しないわけです。軍事教育を受けた  
点や出身を調べたら沖縄人にまちがはなく、兵  
隊でもない事になりました。

山城さんも防衛隊にはいったことはあるが、  
兵隊とは関係ないということでみんななかに入  
られました。

その木村というのが「宮城あなたは正直者だ  
から、いい仕事につけるから心配するな」とい  
うことで、出るときに声をかけられたが「今時  
分いい仕事もなにもあるか」ということで喜び  
もしませんでした。ありがたいと思わなかつ  
たのでした。負け戦でしたからね。

ところが当時の収容所というのは雑役をする  
というのが普通で空かんを腰にぶら下げておに  
ぎりをもって、空かに汁をもらって食べる  
というのが普通だったのです。「みんな並べー」  
といって、毎日ちり拾いに明け暮れるという一  
般労務でありました。ところが私には「宮城は  
モータープールの専属だ」ということで、今で  
いう自動車修理工場にあたりますね。自動車の  
油を給油したり点検したりするわけです。昭和  
バスの運転手だったという知念という人と山城  
というひとが2人いました。4人が専属でした。  
コーラも飲みたい放題、ガムもかみたい放題で  
した。石鯨もたくさんありました。タバコも吸  
いなさいということで特別待遇で、本当にいい  
仕事についているわけです。そこでは自動車の  
いたずらはするし、アメリカ車や戦時中持って  
きてあるぶんどり品の日本車の組み立てをし  
たりしていました。

たまたまアメリカの飛行機が中飛行場を飛び  
立ち編隊を組んで本土攻撃に行くわけですがB  
29とかB24とか戦闘機が必ずいく前に金武湾に  
低空飛行で弾がちゃんと出るかどうか試射をし  
ていくわけです。ある日、どうもこの飛行機は  
おかしいというので見てみると、パイロットが

落下傘で脱出して、飛行機は墜落しました。

私は手を叩いて、みんなにそのことを知らせ  
ようとしたら、ウレーキという中尉が「この宮  
城は」という目をしてにらんでいました。まだ  
敵がい心が強く残っているのを感じました。教  
養のある中尉でした。捕虜になって、いい待遇  
を受けても気持ちは変わらないと知っているわ  
けで、理解してくれている人でした。ますます  
「ストロング宮城 カムヒヤ」とよんでいまし  
た。このストロングというのはある日ネジを力  
いっぱい締めたらナットが飛んで、それからそ  
う呼ばれるようになっていました。

PXの鍵を渡し、石鯨とタバコを取って来る  
ようにいうのですが、いろんな物をとってくる  
のではないかと、試されているのを察知して、  
石鯨1ダースとタバコはわざと少なくとももって来  
るわけです。そして彼は「テンキュー」といっ  
て握手してくれるわけです。こういう風に信頼  
されてモータープールに勤めていました。

(1989年5月12日 採録)

# 開墾地銀原への避難

松田 武雄

( 昭和2年生、当時18歳  
座喜味、屋号金城松田 )

## 銀原へ

私は3月27日の晩に首里に行くことになっており、それで喜名までは行ったのですが爆撃でそれ以上先に行けないのです。それで引き返して、父も病気がちでしたし、家族は荷物を持ていかなないのであれば、山原避難はしないというのです。私が首里に行かないのであれば避難してもいいというわけです。物を持たないで手ぶらで避難してもだめだというわけなんです。首里には行かなければならないし、困ってしまいました。国頭行きを決意して、80から100斤はある荷物を担いで、翌日の28日の晩8時頃、国頭に向かったわけです。ところがどこに行くという当てもないわけです。担いでいきながら、座喜味の人達も見えるので、後を追って行ったら石川に行く人が多いので、それで石川に向かいましたら座喜味の人がやはり多いのです。座喜味出身の人達が宜野座、金武の開墾地に何名かいるようでしたから、その辺に行けば助かると思い、我々もその後を追ったわけです。その開墾地というのはギンバルといっていました。

読谷からギンバルに向かって荷物を担ぎ、徒歩で行きましたが、今でしたら担ぎきれませんね。立とうにも立てません。「あんたがこれを持てないのなら行けないな」と言われて。その中には黒糖の入った甕もあるわけで、他に豆・粟・米等を担げるだけ担いで1人はふとんをもって、いとこの仲宗根憲栄は小学校4年生でしたがいんなものを担いでいました。戦争とい

うのは力が出ますよ。火事場の力とでもいうのでしょうか、自分で振り返ってみてもよく運べたなと思いますよ。私は他の人よりも何時間も遅れていました。石川近辺からは隊列を離れて300mくらい歩いてはまた休み、そうこうして行くものだから山原に入って親たちを捜すために、またひと苦労でした。

比地・奥間が座喜味の避難地に指定されているのは知りませんでした。そのことは後で知りました。比地・奥間近辺に避難して死んだ人もずいぶんいたようです。我々はよかった方です。山から下りるのも2ヵ月目くらいですから。銀原が避難指定地だったということではありません。座喜味の人で、銀原に移住していた人達がいたようで、例えば飛行場建設のために土地を接収されたためにどこに行くかということで知り合いを訪ねたら、県指定の開墾地になっていた銀原・中川でした。座喜味からも4、5世帯そこに開墾で来て、芋を作っているというぐあいでした。それを途中で聞きながらまいりました。我々も仲泊から石川に行くのかそのまま西海岸を上っていくのがいいのか、私には判断できませんでした。前のシンカも銀原に行っているから前を追って行った方がよいということでした。我々の避難は指定ではなく盲めっぽうに行ったということでした。我々は家族を中心に行っているのですが、結局は知り合いが多くなりました。

私のおばも銀原に行きました。南恩納にいった時民家にお世話になりました。そこで1泊過ごして、そこのおばさんにとても親切にしてもらいました。ジューシーをご馳走になりました。南恩納からどう石川に行ったらいいのかわからなかったのですが、翌日の4時頃出発しました。昼はMP・憲兵が立っていて、そこには入れないということで、夜の明けるのをまって石川に入りました。

避難する時は、人の物は盗むし、盗まないと食べられませんし、生きられませんから。人の芋を夜あさりにいくわけですが、豆とかジャガイモ等を掘っていました。銀原と中川では、実際に泥棒もしてきているわけです。生きるためにね。皆の物という感じでした。もちろん畑には夜の夜中に集団で行きました。明日の晩ということで示し合わせて、昼見つけておいて。しかし、初めのうちは畑の主も警戒していましたが、後は夜も見張らなくなっていました。どうしようもないと思ったんでしょうね。開墾地の芋は虫もつかないので美味しくて、1ヵ月くらい埋めておいて保存して食べたのですがたいへん甘くて、炊き込むと砂糖みたいな味がしてね。漢那に行ったら食べる物もなく、苦しい思いをしました。

石川で山からたくさん下りて来る時分ですぐぶん配給もあったらしいですね。

## 捕虜になる

その後米軍上陸があって、恩納岳の東側にブート岳がありますが、私はその麓にちょうど1ヵ月余りおりました。5月の初めからそこにいたわけです。それからはどうてい首里には帰れないわけです。

私は若かったので捕らえられたらすぐ殺されるだろうということで恩納岳の東の谷間に逃げていたわけです。そしたら2日くらいして読谷で捕虜になり金武に収容されている人達がたくさんいるわけです。その中に亡くなった照屋カナさんや仲宗根商店の人達がおりました。仲宗根さんはハワイ帰りで少し英語ができたわけです。その人とアメリカ憲兵と一緒に私を捜しにきたわけです。大きな声で「出てきなさい。出てきなさい」といって。それで私は出て行ったわけです。その時の怖さといったらあり

ませんでした。アメリカ人達の顔は初めて見るものだから、皆キジムナーに見えましてね。体が赤ブーで。

それから捕虜になって漢那に行きました。そこでの仕事は金武にある家を壊して、漢那に運んで家を建てる。また恩納岳を越えて安富祖にいて、そこでも家を壊し材料を漢那に持って行って大工に家を造らせるのです。家の取り壊し作業をさせられたのです。

銀原はカンバンといって労働者が寝泊まりして作業するところで、そこにいました。そこには読谷・那覇・島尻近辺の人が多かったようです。8月いっぱいはそのにおりました。その頃親達も漢那に引っ越していました。漢那は収容所ではなく、掘建小屋を造り、2世帯くらい押し込まれ、8月まではおじいさん達と軍作業を一生懸命にやりました。家造りとか草刈りとか、9月になったら渡具知政功（渡慶次小学校の校歌を作った先生）先生がいらして2ヵ月くらい代用教員をしました。

カンバンでは何名も殺されました。昼殺されたのは2回くらいですが、友軍が夜物取りに入ってきて、倉庫の中から缶詰とか、盗み出しているのを見つけて撃たれました。あるいは同じカンバンに生活している人が憲兵の目を盗んで物欲しさにカンバンに入って物を捕ろうとしているところを撃たれたり、そこから脱走して家族に会いにいくところでやられたり、そういうふうなことがありました。

終戦のことは、日本が降伏したとアメリカ兵が言っていました。それが後で考えると8月15日だったんですね。それを知らされたのは夜でした。カンバンの中で、アメリカ兵達はお祝いをしていましたが、我々は残念でたまりませんでした。ここでは玉音放送はないわけですから。日本は降参したんだということを聞かされて知ったわけです。それでも最初はそれを信じませ

んでした。アメリカの宣伝であって、まだ日本軍はやってくるとしか思っておりませんでした。

## 戦後の学校教育

石川では山内繁茂先生が城前で学校を造っていました。来てくれと言うので12月24日に石川に行きました。

5月頃には初等学校が始められています。我々の使命は教育だと感じていましたから。その頃繁茂先生は40歳くらいでしょうか。それまで軍事教育をして、農業の先生ではありませんが、我々ができるのは教育だけだから、遊ばせるだけでもいいんじゃないかということで、子供達を集めていました。

私が12月24日に石川に来たことを知って、岳原宜正さんが来ていました。PWから彼は南から帰ってきていました。私は学校に行っているから君も来てくれと山内先生がそう言っていると伝えました。その頃から私達も代用教員ではあるわけで、予科の3年をでたきりですが、彼らは本科を卒業していました。1年は戦争に行っていたのですが、認定されていました。我々は本科1年で入ったことになっているのです。実際には予科終了です。戦争の期間もその年度に入っているんです。それで試験を受けて3ヵ月後の4月から文教学校に入ったのです。その頃の文教学校では、私達は若い方で、軍隊に行った人達も一緒ですから、19歳から25歳くらいの人もありました。結局半年の速成教育を受け、石川の大洋小学校というところに呼ばれて、2ヵ月後の1946年11月に移動して読谷に帰って、大湾梅成先生と一緒にテント小屋の学校で教鞭をとりました。

## 鉄血勤皇隊で散った同僚

私は逃げたつもりはありませんでした。

首里から読谷に来た時は、上陸するかどうか分からない頃で、寮に残っている人達はご飯を食べたり、壕に籠もっているわけです。その彼らが中心になったのが鉄血勤皇隊で、私達が出た日の25日に結成されたわけです。25日は卒業式だったようです。それは我々はわからないのです。卒業できるかできないかわからない時代でした。それで命は助かったのですが、私の同僚はそうとう死んでおります。予科で80人ほどおりましたが、残っているのは33人くらいです。最初は国賊というのでしょうか、今でもすまなかったという気持ちはありますよ。戦争というものは、特に南に行った連中はもっと死にものぐるいですから。そういう弾のなかをくぐった人達に言わせれば、あんたはいなくてよかったよと言いますが、同列から外れたことについては呵責の念というのでしょうか、耐えられないですね。古い感覚がまだ残っていて友人らもそれでよかったんだよ、我々も生き残ったことは生き残ったんだがどうにもならないことが多かったといいます。正直いうとそれがずっとあるわけです。生き残ったことについては、祖母が「あんたがいないのなら座喜味を動かない」という一言で響いて、自分がいないと家族みんなが死んでしまうんだということで、それで結局避難したわけです。それはある意味では良かったけれども、それをやったことによって一つは同僚たちにすまなかったといつも思うわけです。これだけは耐えられないですね。師範学校では毎年1回は同窓会をするので、話し合う機会があるわけですが、死んだ人には申し訳ないということですよ。生きていて幸福という気持ちもあるのですが、あの時にはすまなかったという気持ちだけです。（1989年5月12日採録）

# 国頭避難

屋 良 嘉 子

( 昭和2年生、当時18歳  
長田出身、旧姓国吉 )

## 3月29日、国頭へ

当時私は、読谷山村役場に勤めていて、3月26日頃まで役場に通っていたと思います。

戦争の情報も途絶えているし、私にも役場職員として何か連絡が来ないかということで家にいたんです。長田は、飛行場に近い喜名あたりとは違って、あまり空襲もなく安心していたんです。

ところが3月25日頃から、艦砲射撃がひどくなって長田にも爆弾が落ちてきました。それでも壕の方で、しばらく生活していました。喜名あたりから来た人達もたくさんいたのですが、気がついてみると誰もいなくなっていました。それで、壕から家に帰ってみたらそこにも誰もいないわけです。

国頭に避難したのは、米軍上陸直前の3月29日です。家の西側に小高い所があるんですが、そこに家族揃って上がってみたら、普段なら都屋あたりの海が見えるはずなのに、真っ黒なんです。何だろうと思って、目をこらして見ると、船なんです。水面が見えないくらい真っ黒で、これは大変だ、必ず上陸すると思いました。

父が「トナー ヒンギールナイル。ワッターピカール ウマンカイウンドー（逃げるしかない。ここにいるのは自分達だけだ）」と言って、どんなふうに荷物をまとめたかもわからないくらいでした。1年生の弟にまで持てるだけの荷物を持たせてですね。母は一番末の4歳の弟を

背負って、荷物をいっぱい持って、おばあさんは杖をついて、歩いて逃げました。

29日の夜中着いた所は、楚南・山城でした。昼は歩けませんから、夜になると動き出すんですよ。

それから喜瀬武原に行きました。そこで米軍の上陸の噂を聞きました。その時にも情報は乱れ飛んでいました。米軍が上陸して屋良飛行場や読谷あたりで捕虜になった人達を、大きな鍋に湯を沸かしてそれにぶちこんでいるとかいうんです。これは少しでも山奥に逃げておかないと大変だと思いました。

## 国頭をさまよう

それから東村に逃げ、山の中で暮らしました。国頭には避難民がいっぱいいました。その頃は正規の道からは歩けないので、山案内というのがいたんですよ。地元の人達が、みんなからいくらかお金を取って、山の中の道案内をするんですよ。私達は道を全然知りませんから、先頭について行かなければいけないし、荷物も持って大変でした。それでも幸いなことにケガもせず、ハブにも噛まれませんでした。

やっと安田・安波に辿り着いて、避難地は辺土名だからということで、辺土名に行こうとしたら、反対にそこから上がって来る人達がたくさんいるんです。どうしたのかと聞いたら「ナー アマン上陸サーニ兵隊ンイッパイサーニアマンクラサラントウクマナトーン（上陸して兵隊がいっぱいであそこにはいられない）」それで、東側に越さないといけないうことで、みんな東海岸めざして来るわけですよ。

辺土名あたりの狭い土地にこんなにたくさんの避難民が押しかけたら、向こうでは暮らせない、上陸しているならどこでも同じだしかえって東海岸のほうが良いということなので、また

下りたんです。

その時に父が山の中で味噌を盗まれて、味噌も全然無いならどうしようかと、それなら海のほうまで歩こうということで、嘉陽まで行って、その民家に入り込みました。そこの人達は山に逃げて、空き家になっていましたので、薪もたくさんありましたから、海の潮を汲んできて、鍋のいっぱい潮を炊いて塩を作りました。味噌がないからその塩でヌチーイチカリーサ（命はつなげるよ）」ということでした。

ここには蘇鉄もあるし、しばらくはここで暮らそうということだったんですが、避難民がいっぱいで蘇鉄はすぐ無くなってしまいました。私の父は大工道具を持ち歩いて、ノミも持っていたので、「ワンナー ウリムツョーグトゥ チュガトゥーティアトカランフラーサ（私はノミを持っているから、人が蘇鉄を探って行った後からでも掘れる）」と言って土の中

を掘り起こしていたんです。

蘇鉄は毒があるので、削いで発酵させないといけないんですが、川原に埋めておくと盗む人も多いものですから、子供達に蘇鉄の番をさせるんです。だしも何も無くて、海水で作った塩を入れて、桑の葉を摘んできて入れたり、雨が降るとかたつむりを入れて炊いて食べました。

4歳になる一番末の弟は、蘇鉄を食べて食中毒をおこしたのか、おなかが膨れて食事もできなくなり、小さい芋を一つあげたのですが、1年生と3年生の弟達もおなかをすかせているので、末の弟が芋を落としたら自分が食べるのに、と落とすのを待っていました。それくらい食糧がなかったんです。

一番末の弟がそういう状況でしたので、父も「この子に万一のことがあったら、この川の側に埋める」とまで考えていたらしいんです。



収容された少女達

## 投 降

そこでは1ヵ月くらい暮らしましたかね。そのうちに嘉陽の住民が「戦は負けたんだから、出ようじゃないか。アメリカーは殺しはしない。みんな一緒に出よう」と避難民に声をかけたんです。そうして嘉陽の村民が一体となって、白旗を挙げてですね。先頭に立って、私達もその後に続いたんです。若い娘達は、鍋の煤を顔いっぱいにつけて出たんですよ。

そしたら黒人が一列に並んでいて「ウレー チュルヤガヤー（この人達は人間だろうか）」と、見たいけど見ると恐いし、あんな怖い思いをしたことはないですよ。

それから瀬嵩に落ち着いたわけですよ。瀬嵩では米の配給がありました。シャム米といって細長い砂利みたいな石がいっぱい入っていて、米を選んで食べるのは大変でしたけど、そこでは米も食べられ、とても嬉しかったです。

ところが瀬嵩ではマラリアが流行して、人がどんどん死んでいくわけです。せっかくここまで生きてきたのに、ここにいたら永くは生きられないというところで、夜明けに逃げたんです。

## 金武村松田から石川へ

金武の松田に弟の友達がいて、そこを訪ねて行ったら「ここは芋もあるし早くおいで」と言ってくれました。ここだと大丈夫ということで、父が避難小屋を造りました。屋根は茅で、床は竹で編んで造って、涼しかったんですよ。

私はそこでミシン部というところに働きに出ました。小豆の入った大きなおむすびをもらうのがとても嬉しくて、半分は自分で食べて、半分は持って帰って弟に食べさせました。弟もだんだん元気になってきました。そこには2、3ヵ月いたと思います。

私の従兄弟の知花ホウカイさんが、石川で配給課長をしていて、私達が松田にいるのを誰かから聞いて、迎えに来たんです。「私達はここで家も造ってあるし、ここで落ち着くよ」と小屋を造ったことを大きなことのように考えていたんですよ。すると「こんな家なんか何の値打ちもないよ。石川にきてみて下さい」というので、車に乗せられて行ったんです。そしたら一斗缶の1杯分の粉や野菜の缶詰、それに毛布も1枚ずつ割り当てがありテント小屋まで割り当てられて、びっくりしました。

（1989年6月20日採録）

# 読谷村内で捕虜になる

喜友名 タ ケ

( 明治40年生、当時38歳  
波平、屋号喜友名 )

## 十・十空襲以降

十・十空襲の時は、娘のテル（当時13歳）が「間違なし、間違いなし、空襲、空襲」と言ったのでみんなびくびくして「早く壕に壕に」と、自分達で造ってあった壕に逃げました。

最初の頃はその壕に避難していたのですが、十・十空襲後はどこに避難したほうがいいのか大きなニクブクをもってチビチリガマにも行きました。ところが、チビチリガマは入口は小さいのに穴は深くてあまりいい気持ちではなかった

ので、そこからシムクガマに行きました。

夫は防衛隊に召集され、子供も多いし、どこに行っても同じことだろうということで、山原には避難しませんでした。一番下の子はまだ1歳にもなっていませんでした。

どこにも逃げずに、シムクガマに避難していたのですが、そこにも砲弾がどんどん飛んで来たので、そこから出て家の近くの日本軍が造ってあった防空壕に移りました。

## 波平で捕虜になる

そのうちに米軍が上陸してきて、アメリカカーが「みんな出なさい、出なさい」と言ったので壕から出ました。4月のはじめ頃です。

「絶対に殺しはしない」と言ってお菓子なんかは、自分が少し食べて大丈夫だということを見せてから、渡していました。長男の義昭（当



米軍上陸直後に捕虜になった人々。どの顔も不安気だ。

時11歳)はすぐそれを取ったのですが、毒が入っていると思ったのか食べはしませんでした。

そこで捕虜になった人達は、都屋の壕に集められました。都屋に連れて行くための戦車が来た時、テルは私に「母ちゃん、早く、天皇陛下バンザイしてあの戦車にやられよう」と言っていました。私は「絶対死なない。絶対死なせはしない」と頑張ったものでした。死ぬんだらどこで死んでも同じだから生きられるだけは生きようと思ったのです。その戦車は私達を都屋の収容所に運ぶためのものでした。

都屋のガマに集められ、そこでは食べ物もありました。

波平の人は山原に行った人もたくさんいるし、避難しないで波平に残った人もたくさんいました。

## 収容所へ

しばらくは都屋にいて、その後渡慶次にいてそれから金武に移され、その後宜野座に行かれました。

捕虜になってからは食べる物も無くなって困りました。義昭達は金武や宜野座にいた頃、読谷まで食べ物を探しに行っていました。アメリカの兵隊さんから缶詰等をもらって帰る途中、巡査にそれをとられ、手ぶらで帰ってくることもありました。

捕虜になってからはテルに末の幸子の子守をさせ、私は食べ物を探しに行きました。

## 夫との別れ

夫は防衛隊に召集されて、登川にいましたが、1度家に面会に来ておりました。その頃までは、まだ米軍が上陸するとは思っていませんでした。このままここにいることはできないだろう

かと思っていましたが、それは無理でした。

面会に来た時、夫は死を覚悟していたのか「子ども達はおまえが連れているから」と言って、半分ずつ分けて持っていたお金を全部私に渡しました。次男の義信(当時4歳)はその日、熱を出して寝ていたのですが「父ちゃん、行かないで」と泣いていました。その時が最後で、そのまま夫は帰らぬ人となってしまいました。

戦争が激しくなって、南部のあちこちを移動して、喜屋武岬まで行ったらしいです。

戦後になってから、防衛隊で一緒だった宇座の金城三平さんが帰還してきて「私達が祀つてあるからそこに行こう」と連れて行ってくれましたが、とうとう遺骨は見つかりませんでした。

(1988年8月23日採録)